

る機材を運び上げた。起重機はこのためにある。起重機装置は、唯一の先行事例であり、柏と同様の支柱からなる高射砲第1連隊の絵葉書に見る姿に倣い、外壁に残る支柱支持材取り付け位置を根拠とした。

・支柱

支柱上部から差し出されたL字型の腕が起重機の一部を構成し、地上からの荷揚げに使われたことが、浜松の高射砲第1連隊の絵葉書写真によって裏づけられた。

屋上西側に立つ起重機支柱間の内法は4メートルあり、躯体の柱間（柱真基準）4メートルより広がっている。当時屋上で使用した測遠機の長さには2メートルと3メートルがあったとされ、作業空間を考慮して計画されたことがわかる。防空学校の図面からも、建物の柱間4メートルからずらして支柱間が広く計画されたことがわかる。

・横架材

両支柱の腕には、横架材が架け渡されていた。L字型腕の上端に残るボルト切断痕より、この位置と断面寸法の概略が判明した。支柱内側の面から約1.5メートルの位置に、下端の幅が約20センチの部材が載せられていた。外壁寄りの位置にもまばらなボルト切断痕があるが、用途は不明である。

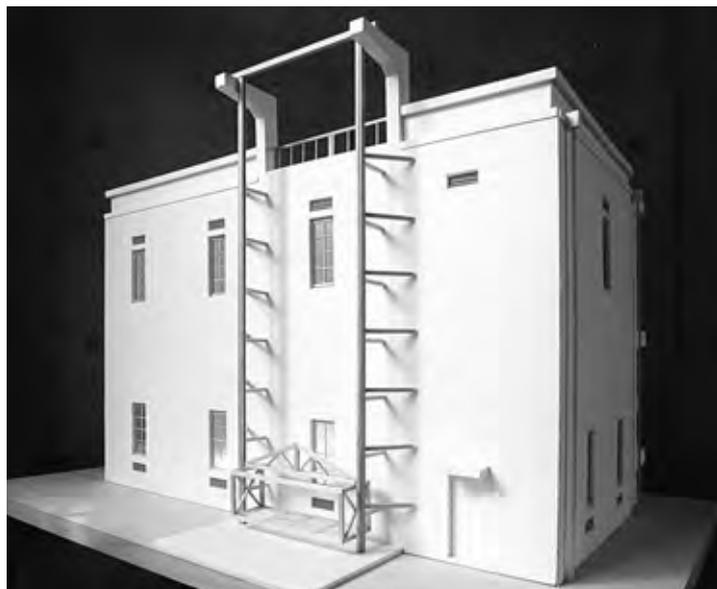
・ガイドレールと控え

起重機の籠は、地面から屋上までガイドレールに沿って昇降した。ガイドレールには、籠のトラス端部が入る溝があったと考える。

西面の外壁には、起重機の取り付けられた痕跡が見られる。地面から支柱まで立ち上がったガイドレールは、壁面に金物で取り付けられていたことが浜松の絵葉書に見られる。ガイドレールから壁面に対して垂直に伸びる主たる金物と、起重機が上下する空間の外側に向けて支柱から伸びる控えの金物が、V字型となってレールを支持する。金物を壁面に緊結したボルトの跡が壁に残っており、先端にネジ



高射砲第2連隊照空予習室復原模型 起重機詳細



起重機のある西面全景

模型 製作と写真 市原徹

の切られたボルトは、それぞれ2個が対となって使用されていた。

外壁面に残るガイドレール控え（中央寄り）を取り付けるボルトの真々寸法は、4,060 ミリである。地面から 2.0 メートル、ここから上は 1.5 メートル間隔、パラペット側面にも取り付け、7 対合計 14 箇所 of 控えがあった。この痕跡と浜松の絵葉書とを比較すると、柏の建物とほぼ同位置でレールを支持していたことがわかり、共通の設計書が使用されたことが想像される。静岡大学時の写真にも、控えを撤去した跡が壁面に確認できる。

図面及び模型作成にあたっては、ガイドレールは壁面より 1 メートル張り出した位置に立て、2 種の控えの真々の間隔を 830 ミリと仮定した。

・籠

起重機で測遠機を屋上に引き上げるのに、鉄製の籠が用いられたことが、浜松の絵葉書よりわかる。床と側面のあるコの字型の構造の上にトラスを載せて頂点で吊り上げる。トラス長手方向の端部がガイドレールに納まる。詳細は不明であるが、建物との比較から大きさを判断した。

・叩き

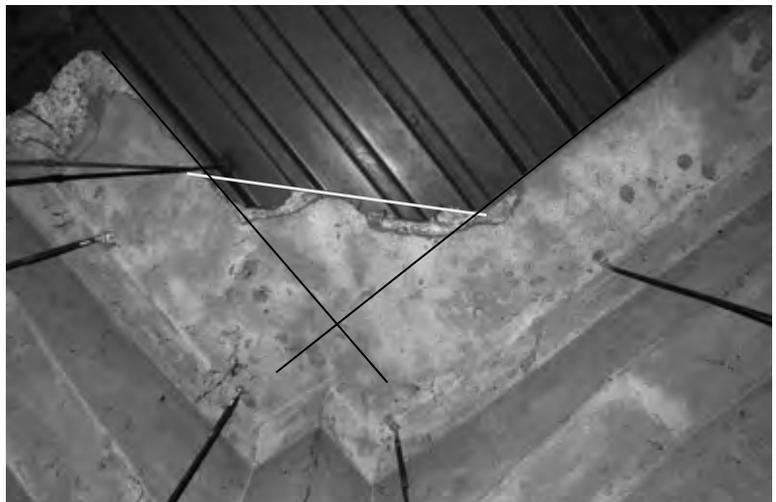
防空学校の図面では、正面出入口前及び起重機の下に叩きが見られる。これに倣い同規模の叩きを設ける。叩きの高さを地面から 100mm と想定したところ、東面外階段一段目の蹴上げの高さが確保できるようになった。（現在は建物周囲の舗装の下に埋もれている。）

・巻き揚げ機

高射砲第 6 連隊（平壤）の図面には、建物の近くに「巻揚機」が四角で表記されており、建物と線で結ばれている。同様に、防空学校の図面に四角が描かれており、キャプションはないが巻き上げ機であると判断する。これでケーブルを巻き上げ、起重機の籠を昇降させたのであろう。測遠機、籠とあわせて何百キロもの重量を持ち上げるには、相当な機械が必要となる。起重機の構成は解明したものの、動力や仕組みは不明である。

回廊隅部見上げ 入り隅では直線で相対する面を繋いでいたことが判明した。
面の長さは 820 ミリ（補助線加筆）

なお、加古川の高射砲第 3 連隊では、入り隅は円弧を描く。



高射砲第2連隊防空習室 復原根拠を太線の□に示す

内外	部位	復原の考え方	柏 調査		類別調査					
			現地調査	史料調査	聞き取り調査	千葉	浜松	加古川		
外部	開口部	1階正面出入口	古写真より庇、開け放ししやすい吊り戸の引き分け戸と推測	シャッターに改造	古写真より庇が判明、吊り戸の引き分け戸か		高射砲第1連隊	高射砲第3連隊	その他	
		1階西面出入口	庇、上層に倣い引き込み戸	庇痕跡、西面最南間に開口部現存、アルミドアに更新			大学古写真に写るのは引き分け戸か(70周年記念写真集)	1990年改修前は幅広引き分け戸(撮影時期不明)		
		2階東面出入口	同形式とみなし引き込み戸	庇、引き込み戸用鴨居は当初材か。戸は後設、当初の敷居・床は15cm低かった以下に示す改造に対応(※)			絵葉書写真に庇写る			
		窓	正面は古写真に倣う、他は痕跡と計画寸法から割り出し	アルミサッシに改造、一部開口部の拡張あり 1階天井裏で窓痕跡を確認	古写真、上中下段に分かれる	2階は小さい窓、千葉大時代には外に錠戸	上げ下げ窓	開口部は横長、引違窓か	1階は両開き戸か、2階は上げ下げ窓 上層は窓上、下層は見えない	
内部	階段	換気窓	現存	当初材現存	上層は窓上方、下層は窓下方に設ける					
	屋上	床面	現存	手摺りは鉄管を組み立てる。滑り止めタイル付						
		柵	クリンカータイ	防水層下に残るかは未確認				クリンカータイ張り、古写真には現存せず		
		デッキ	浜松に倣う	上下肘壺残存				絵葉書写真 樋受けを張り出す		
壁	仕上げ	なし			古写真で確認できない		屋上床高で張り出す			
	起重機	支柱	現存	最下層にモルタル塗刷毛引き仕上げ 現存、内法4m					現存せず、異なる形式だった	
	横架材	親柱東つらから約1.5m、200mm角とする	腕上端に取付ボルト残る →位置と寸法				絵葉書写真、大古写真 絵葉書写真		甘木の親柱は柏と同形式	

3-4 内部

・回廊

2016年2月、柏市文化課による外部委託事業として建物の三次元復原画像を作製するために、1階奥南側に張られていた吊り天井及び壁仕上げ材が解体撤去された。

当初建物内部は吹き抜けて、今日の2階の高さに回廊が回されていた。1階の南半分に張られた天井の懐に、回廊の残部が残存しており、吊り天井を撤去したことにより、全貌が明らかになった。回廊は南端の間にのみ設けられたコの字型であった。回廊は防空学校の図面及び建物が現存する加古川の例にも見られる。

回廊の幅は、約700ミリである。なお、防空学校の図面では1メートル、加古川での実測により壁内側から1メートル幅であることが確認されている。

柱が壁から突出する南東及び南西隅部で回廊の入り隅は、加古川のように円弧ではなく、直線で隅切りされていたことが残存部から読みとれる。

現在は2階に床を設けるために、鉄骨の梁を躯体に挿入し、折り曲げ鋼板で床面が造られている。この上にコンクリートを打ち、2階床スラブとする。当初の矩計では、1階梁上端の高さが回廊床面と揃う計画になっているため、梁上に鋼板を載せるためには、回廊縁の立ち上がりを取り除く必要があり、この部分がはつり落とされた。

・回廊手摺り

回廊には金属製パイプからなる手摺りがあり、回廊の幅はとても狭く、幅が30センチぐらいであったという証言がある。加古川では、回廊内側の立ち上がり上端に直径3センチの鉄管の手摺り子が切断された跡が確認できた。柏では、柱が壁の内側に突出する位置関係にあるので、回廊幅を1メートル確保しても、柱際ではたいへん狭くなる。隅柱は室内壁面から53センチ張り出すのに対し、他の柱は63センチ張り出す。

本建物の2階を利用して高野台町会が隣地に新築された建物に移ったことにより、室内にあった仕器が撤去され、壁面の回廊手摺りの取り付け痕が確認できるようになった。回廊自体から手摺り



1階南側では、現在の床面の135ミリ下にコンクリート叩きと高さ200ミリの幅木が確認された。



階段踊り場から回廊への出入口は、下端が低かった痕跡がある。現在の2階床は回廊の上に載せられ、高くなっている。

子の間隔は判明していたが、手摺りの高さが床面より750ミリであったことが明らかになった。また、痕跡にみる抜き取った手摺りの直径は48ミリ（実際はこれより小さいかもしれない）、手摺り座金の直径は100ミリである。外部階段では手摺り直径が43ミリであることから、回廊の手摺りには、外階段と共通の部材が使用された可能性が高い。

・梯子

室内南東隅から1間北側の柱西面に梯子の痕跡が残る。直径22ミリの鉄棒からなる梯子が、1階床から回廊床まで、高さ方向300ミリ間隔で取り付けいていたことが明らかになった。梯子の幅（鉄棒の横方向の間隔）は約470ミリであった。2階床より上（かつての回廊の上）では同じ柱南面には梯子2段の痕跡が見られ、400ミリ弱の間隔で高さ方向では600ミリ離れていた。

梯子から回廊にあがる時につかまる手摺りは柱の南面にあったことが判明したが、回廊の残存状況からはどのように人が柱西面から南面に回ったのかは定かでない。デッキのようなものが張り出していないと移動は難しい。この位置の回廊床の破損部からは比較的長い鉄筋が突出しており、回廊床の形が例えば斜めに張り出すように他とは異なっていた可能性がある。

・床・壁・天井

床

1階室内南側のもとの床面は、現状より125ミリ下がった位置にあったことが柱際の床面を掘り下げたことから判明した。モルタル塗の幅木が当初の床より200ミリ立ち上がっている。

壁

鉄筋コンクリート造の壁には、直径9ミリの丸鋼鉄筋が縦横とも200ミリの間隔で2本ずつ並べて配筋されていることが、内装材を撤去した時にあらわになった当初の壁に確認できた。壁の厚さは、1階で約180ミリ、2階では150から160ミリである。1階、(今日の)2階境には躯体内周に梁が廻っており、ここを境に上階の壁厚を薄くしている。2階天井より下方の壁面は、柱面を含めて全面に約30ミリ厚さのモルタル仕上げが施されている。

2階出入口脇にある当初の電気系統の設備（スイッチまたはコンセントボックス）の納まり、加えて、同じ設備の痕跡が南西隅の部屋の西壁にも見られ、当初の室内壁仕上げ面が今日と変わらないことがわかる。現在は室内にも外壁と同様の吹き付け仕上げがなされているが、当初は前述の1階南側の後設された天井裏に見られるようなモルタル塗であったと考える。(p115)

1階南側の壁仕上げ材を撤去したところ、外壁とともに内部の一部に施されていた消防署時代の黄色の仕上げが現れた。

内外壁の色の変遷については、別表に整理した。(p118)

天井

天井造作を境に、下方の壁表面にはモルタル塗仕上げが施されているため、当初から2階の天井が張られていたことが判明した。この天井は、梁下端から突き出す鉄筋を利用したり、あるいは梁側面に羽子板金物をボルトで緊結し、天井下地を吊っている。天井下地は部材の躯体との取り合いや表面の状態から、当初材であると判断した。天井野縁には、使用されていない釘跡が約1.5寸(45ミリ)

間隔で細かく打たれており、映写幕の帆布を留め付けた跡と考える。布の厚みにもよるが、1.5尺(450ミリ)間隔で配置された野縁にこれほど小さな釘で重い大きな布が支持できるのかどうかには疑問が残る。

石膏ボードの天井板に取り付く蛍光灯照明には「松下電工株式会社 昭和42年」とあり、消防署分署として利用するために、天井板とともに設置されたことがわかる。

・設備

映写幕

防空学校の照空予習室では、回廊の高さに開閉式の映写幕を設置する計画となっていた。柏では回廊が建物南端にしかなく、建物現地に該当する設備の取り付け跡がない。また天井に布が張られていたという証言が得られていることより、天井の高さに常設の映写幕があったことがわかった。

間接照明

1階では、コンセントの口が窓の上端より少し上の高さに確認され、これらは壁面の照明用であると考え(p126 痕跡図参照)。一方、防空学校照空予習室の計画に見る大がかりな間接照明設備はかなりの重量になると思われるが、このような設備の取り付け跡は確認できなかった。



柏歴史クラブは2015年より毎年現地見学会を行っている。写真は、2016年11月の催し。

写真 和田裕子

天井解体 2016年2月



2階西壁南から2本目の柱東面
手摺り痕跡（現床面は後設）



南面の壁を見上げる 回廊の幅、手摺り子が600ミリ間隔で立っていたことがわかる。回廊縁の厚さは120ミリ。
壁面に間接照明を取り付けた痕跡は確認できない。
2階の床を造るデッキプレートは回廊の上にのせられている。



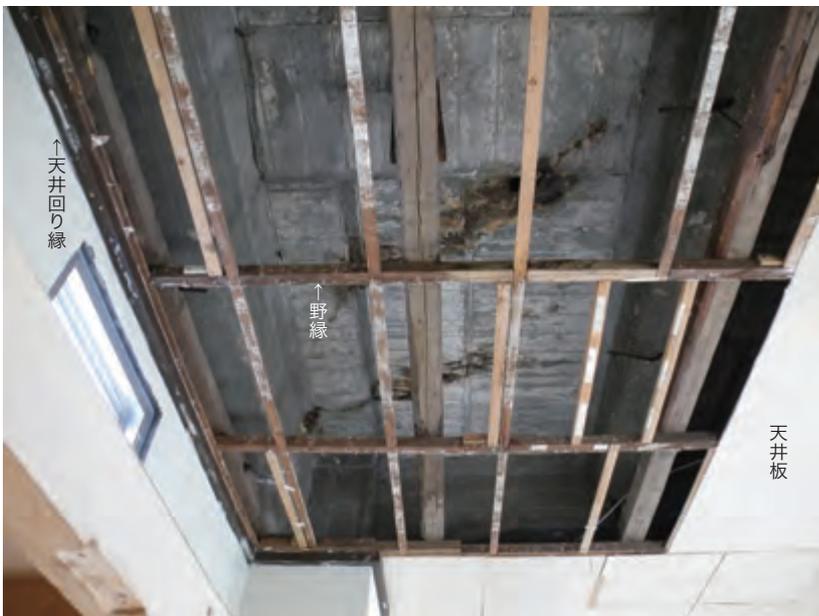
柏市による3Dレーザー測量実施のために天井を解体、回廊と梯子の痕跡が明らかになる。
梯子の取り付け柱西面。梯子は幅約470ミリで、高さ方向に300ミリの間隔で取り付けられていたことが読みとれる。



吊り天井撤去後の1階南側
消防署時代の造作を撤去し、はじめて全容が見えるようになった。



東面の壁 2階を設ける時に鉄骨梁を取り付けた位置では柱の表面がはつられたために、柱上方の梯子の取り付け痕は失われている。
壁面には小さいボールのようなものが当たった跡が全面に無数にあり、高射砲連隊及びその後に入った軍隊によって本建物内での演習によってついたものか。



前身天井の留め釘の跡は、1.5寸間隔とたいへん狭い。(→で位置を示す)
現状は同間隔に釘4本程度で留める。

2階の天井造作は、当初材。現在の天井板は、後補の吉野石膏のタイガーボード。
野縁には、前身天井の留め釘跡があり(右図)、帆布取り付け跡と思われるが、布類の断片は確認できず。
壁面については、天井回り縁の上方はコンクリート打ち放し、下方のようにモルタル塗仕上げはない。



天井に張られた吉野石膏製板材裏面のロゴと「特許出願中 タイガーボード」の文字

復原調査 / 起重機



高射砲第1連隊(浜松)
照空予習室に見る起重機
ガイドレール支持材

p33 の絵葉書参照

壁面に残るボルトの切断
跡より、起重機ガイドレール
取り付け位置が判明。
高射砲第1連隊の絵葉書
写真と合致。右にガイド
レール中心控えの高さ方向
の間隔(1.5m)を示す。

写真 小林正孝



控えは高さ方向
1.5m間隔で
左右7箇所ずつ
取り付けていた



起重機ガイドレール位置検討状況(ガイドレールを加筆)
壁に残るボルト切断跡より、控えの位置を確認。壁面より約1メートルとした。



起重機支柱の上端に残るボルト切断跡から、横架材や控え(か)の状況を推定(架かる材の向きを加筆)



起重機ガイドレールの
支持材をボルト締めで
壁面に取り付けた跡

赤○：縦に100ミリ間
隔で2本並ぶ(中心寄り)

黄○：横に65ミリ間
隔で2本並ぶ(外側)

壁に埋め込まれたネジ
を切った鉄棒
直径15ミリ、座金付

復原調査 / 壁仕上げ

壁面及び造作仕上げの変遷

	時代	I	II	III	IV
		当初	分署	分署改装 1	分署改装 2
		昭和 13	昭和 42	昭和 50 年代	現状
備考			2 階床を張る	外壁を白色に 便所増築	窓をアルミサッシに
外部	外壁	モルタル塗	黄色吹付	白色吹付	白色ペンキ塗
	階段 / 塗装		赤色錆止、 ブルーグレー	薄ベージュ	薄ベージュ
窓	窓 / 塗装	木製 / 色不明	木製 / 黄色	木製 / 黄色	アルミサッシ
	1 階 ガラリ / 塗装	ガラリ	ガラリ	ガラリ	薄ベージュ
	2 階 ガラリ	ガラリ	ガラリ	ガラリ	アルミサッシ
	シャッター	—	シャッター	シャッター	シャッター
室内	1 階 窓額縁	不明	焦げ茶	焦げ茶	焦げ茶
	2 階 窓額縁	不明	ブルーグレー	ブルーグレー	ブルーグレー
	2 階 間仕切り建具	—	灰色	灰色	灰色
室内壁	1 階南東	モルタル塗	黄色漆喰	化粧合板	化粧合板
	1 階南西	モルタル塗	白色漆喰	化粧合板	化粧合板
	1 階北	モルタル塗	モルタル塗	モルタル塗	モルタル塗
	2 階	モルタル塗	不明	不明	白リシン吹付
天井	1 階 1 階南	—	デッキプレート設置、 天井を張る	鋼製吊り天井	鋼製吊り天井
	1 階 1 階北	—	デッキプレート	デッキプレート	デッキプレート
	2 階 天井	帆布張り	天井板を張る	II 期の天井板	II 期の天井板
	2 階 天井回り縁	灰色か	焦げ茶	焦げ茶	焦げ茶



1 階室内南東隅 内装材を撤去すると、消防署に最初に改装された当時の壁仕上げが表れた。写真は風呂場と洗面所。この黄色の仕上げは、外壁仕上げの下に残る黄色い仕上げと時代が揃うと思われる。



外壁破損部より、仕上げの変遷がわかる。モルタル塗刷毛引き（当初）→黄色吹き付け→白色吹き付け→白色ペンキ塗（現況）



正面シャッター足元に埋め込まれて残る金物は、当初吊り戸の敷居か。



2階外階段からの出入口 当初吊り戸の鴨居。1階出入口にも同様の造作を使用か。2階の戸は更新されている。

什器：六人用机

高野台町会が2階で利用していた会議机のうち2台は、寸法が幅3尺×長さ6尺、天板は30ミリの厚板からなり、陸軍で用いた6人用の机と寸法及び仕様が合致することから、当時の標準仕様に倣って製作されたものであったことがわかった。(藤田昌雄『写真で見る日本陸軍 兵営の生活』p60)

座卓として利用する長さに切断された脚は継がれている。天板裏側中央に残る斜材の断片を延長すると長かった脚の位置まで達し、天板高さは2.5尺であったと考える。天板裏側に溝を掘り、ボルト締めした上で埋木をする頑丈な造りになっている。



町会室に残る陸軍時代の机



厚板間はボルトで継がれる。切断された斜材端部が残る



座卓用に改造されていた脚を延長して使用



側面に「波五班」と書かれている

屋上



屋上全景 北を見る



起重機支柱



屋上から北を見る



屋上から東を見る

屋上他



屋上 起重機支柱側面



屋上 起重機支柱足元に残る肘壺金物。各支柱の内法下方と腰高（現在の柵ぐらの高さ）に残る



屋上 排水溝隅部から雨樋に雨水が落ちる



屋上 階段上がり口に見るパラペット断面



屋上 起重機支柱上端に残るボルト跡



屋上 パラペット外廻り詳細



西面に増築されたコンクリートブロック造の便所。撤去後の壁面には黄色仕上げ



西面、南から見る。消防署車庫の痕跡

階段



屋上への上がり口 踊り場



屋上への上がり口 手前に排水溝が見える



屋上踊り場から下方を見る。
すべり止めタイヤが踏面手前角に取り付く。



踊り場で折り返しながら上昇する階段



階段 上がり口側面



手摺り詳細 1/ 手摺り・手摺り子接続部
2/ 手摺り子座金 3,4/ 手摺り子に太い管を繋げて使用



階段 上がり口正面には扉。階段1段目が埋もれている

1階・2階



1階 天井トラス



1階 正面シャッター上方に大梁が架かる



1階 壁沿いに大梁が架かる



1階 奥は消防署が事務室として利用

窓額縁の痕跡



2階 窓周囲には現状より幅広の額縁が付いていたことが、周囲を塗り直した跡からわかる(→の位置)



もとの窓額縁の幅と上端の位置

1階 室内では、拡張された窓開口部上方に、額縁を取り付けた痕跡が残っていた。コンクリートに木片が埋め込まれている



↓窓痕跡

↑換気口痕跡

1階 消防署として利用するために、開口部は大きくされてアルミサッシが建て込まれていた

2階



2階出入口脇に人造石研ぎ出しの流しがある



2階 町会室への出入口。画面左の戸から商店会室へ



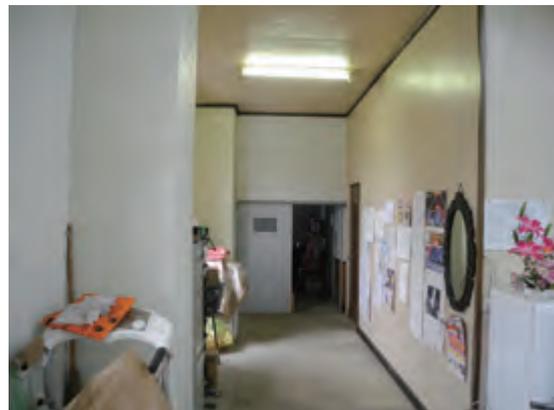
2階 商店会室西を見る



2階 商店会室東を見る



町会室 東を見る (北東隅の天井を調査のために解体後)



2階 町会室から南を見る



2階 町会室北西を見る



2階 町会室南を見る

2 階天井裏



北東隅柱に大梁が2方向から架かる



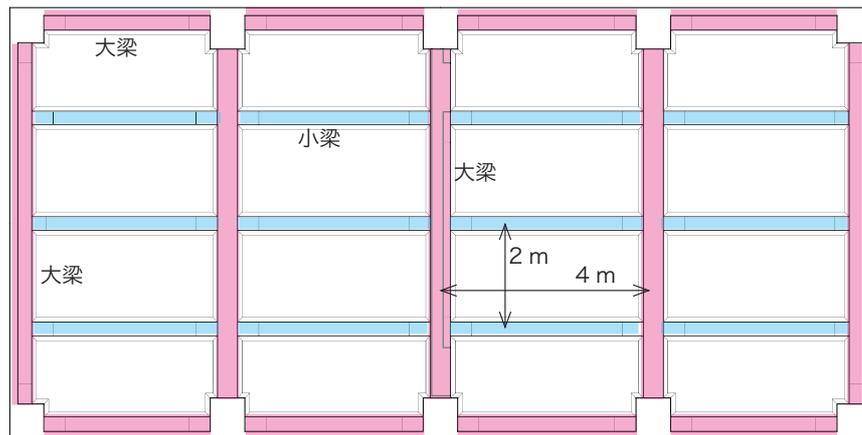
東西に架かる大梁中間に、小梁が取り付け



小梁下に突出する鉄筋に野縁受けが取り付けく。
この下に野縁を打ち、天井板を張る。



小梁のない位置では、天井に受け材をボルト締め、吊り木で野縁受けを吊る。野縁受け先端は大梁にボルト締め



2 階天井梁伏せ図 2メートル×4メートルの格子状に梁を密度高く配置する

電気系統



1階西壁 スイッチボード内部見上げ
配線の本数は、防空学校の調光操作盤結線図と一致する ※



柱面コンセントの痕跡 直径80ミリ



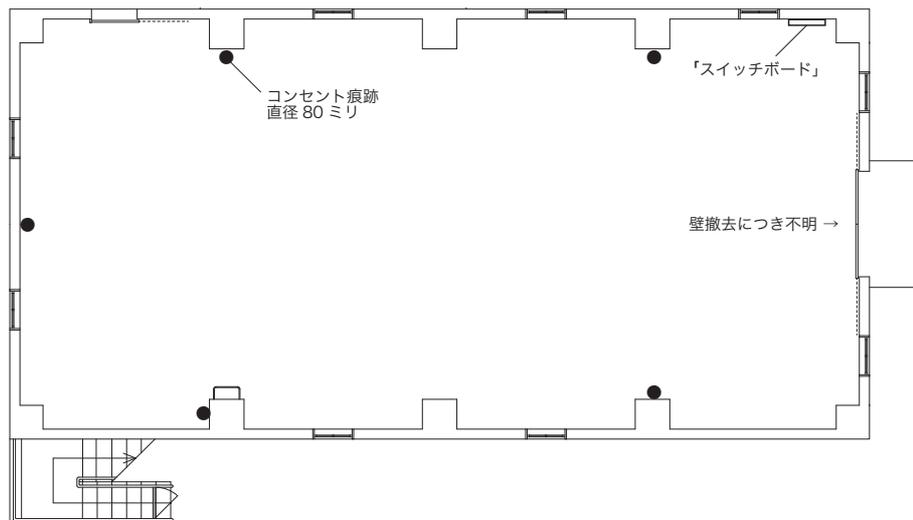
1階西壁 スイッチボード跡



2階出入口脇（右）照明及びスイッチ痕跡
（左）スイッチ痕跡詳細



※ 「図番7 結線図（調光操作盤）」、「練習用具備付の件」所収 昭和14年 JACAR Ref.C01002278100 防衛研究所



1階 電気設備痕跡図
（復原平面図に示す）



根戸の光景 旧柏市西部消防署根戸分署／高射砲第2連隊照空予習室

第6章 むすび

長らえてきた堅牢な建物

柏市根戸の角地に立つ白い四角い建物は、昭和13年の高射砲第2連隊設置時に営庭南側中央に建てられた、「照空予習室及測遠器訓練所」と呼ばれる高射砲連隊特有の演習施設であることが明らかになった。室内に最新技術の電気設備を用いて「空をつくり」、高射砲射撃の指揮を予習した。連隊地のどの屋根よりも高い屋上には、重厚な起重機を持ち上げて遠方の航空機の位置を測定。ここで軍人らは国土防空のために励んだ。

照空予習室が国内で建てられたのは第二次世界大戦時、嚆矢となった浜松の高射砲第1連隊（昭和11年以降建設）から最後に立川に置かれた高射砲第7連隊（昭和15年設置）まで、わずか5年間に限られる。同様の建物が陸軍によって建てられたことが確認できたのは、防空学校を含み国内外7箇所、そのうち現存するのは柏と加古川の2棟である。公共所有のは、柏の一例のみである。

柏の高射砲連隊地の他の建物は取り壊されたり、建て替えられたりしていった中、この照空予習室だけが今日まで長らえてきたのは、鉄筋コンクリート造であるがゆえに解体しにくかったことも幸いしたのであろう。他の連隊や学校でも、最後の1棟として残ってきた例が見られる。

長年の使用に耐えられるもともと頑丈な建物であるからこそ、建築から80年経っても使い続けられてきた。建築当初の姿からの変化は一見大きく見えるものの、躯体への改変があっても建物の本質は十分に継承されていることが、本調査を通して確認できた。

歴史を伝える要の建物

昭和初期に高射砲第2連隊が根戸に転入してきたことにより、様々な方面で地元との関わりが生じた。まずは連隊用地として多くの家々が土地の提供を強いられたことがあげられる。ついで行われた大きな建築工事の各段階は、地元の労働力にも頼って行われたであろう。一方、商店や飲食店は栄え、連隊関係の仕事に携わった者もいただろう。土塁で囲まれ、営門には兵隊の立つ連隊地は、普段は立ち入ることができないながらも、地域社会の中の大きな存在であった。

第二次世界大戦が敗戦を迎えると、連隊跡地は開拓地となった。戦災で住まいを失った方々やパレオを中心とする南方からの引き揚げ者が根戸を新天地とした。早くも昭和24年(1949)に創立され、地域の自治を担ってきた高野台町会は、半世紀にわたり旧分署の2階に入居していた。現高野台児童公園で盆踊りを開催し、住民たちの親睦をはかったのが町会の始まるきっかけであったという。今日の農林水産省による利根開発を通じて土地改良に尽力したことが町会の歴史の中でも大きな事業であった。

昭和30年代になっても周囲には陸軍の建物が残る荒地であったことが、古写真からうかがえる。その後、公営住宅や学校が設けられ、豊かな社会基盤が整えられてきた。環境が大きく変化した根戸ではあるが、連隊時の土地区画が戦後の街区や敷地割りに引き継がれており、その要所にこの建物は

立つ。日々目にする建物、すなわちランドマークとなっている。だからこそ、この地域をまもる消防署の場所にふさわしく、長いこと北柏の拠点とされてきた。

旧分署の建物は、根戸の地域社会の発展を支えてきた原点として、この土地の歴史の一側面をかたちある姿で伝えことのできる唯一の存在でもある。

課題

今回の調査は、「旧分署」の建物1棟から陸軍の高射砲連隊内の各種建築や施設へと視野を広げるきっかけとなった。この建物について調査で知り得たことはほんの一端であり、さらなる研究が待たれる課題は数多く残る。全国的にもこの建物種は着目されたことがなく、建築の分野における既往研究はない。高射砲連隊の建物について具体的に知ることのできる防衛省所蔵の史料も限られている中、「旧分署」は特有の施設を空間として体験できる事例となる。

各地で明治時代以降陸軍及び海軍によって建てられた建築は残され、活用されている。師団司令部や偕行社のように比較的外観が華やかなもの、あるいは大ききで見ざる者を圧倒する赤煉瓦の倉庫などは、わかりやすい遺産である。それに対して、規模が小さくて見かけも地味な質実剛健を旨とする建物は見逃されがちで、その実体を明らかにされる前に、知らぬ間に消えてしまうことも多い。

今後、柏においては、建物が照空予習室として建てられてから今日に至るまでの外観のわかる写真や建設及びその後の使用に関わる諸史料（連隊専属写真家による絵葉書や写真、戦時中の一般公開時や開拓時代の写真等）を発掘し、歴史的な裏づけ及び往時の建物の姿を追究したい。

建物は人と共にある。しかしながら、どのように業務上建物が利用されたのかは他の建物種と異なり想像することが難しい。本研究では施設としての建物を明らかにすることはできたが、人の問題は未解決のままである。

各領域の専門家の協力を得て、残された疑問をひとつずつ解き明かすことにより、柏市市域の近代史の証人として、この建物の担う役割はさらに重みを増すことと考える。

図 面

高射砲第 2 連隊照空予習室

現状図

1 階平面図

2 階平面図

屋上平面図

正面図

東立面図

西立面図

背面図

梁間断面図

桁行断面図

復原図

1 階平面図

2 階平面図

屋上平面図

正面図

東立面図

西立面図

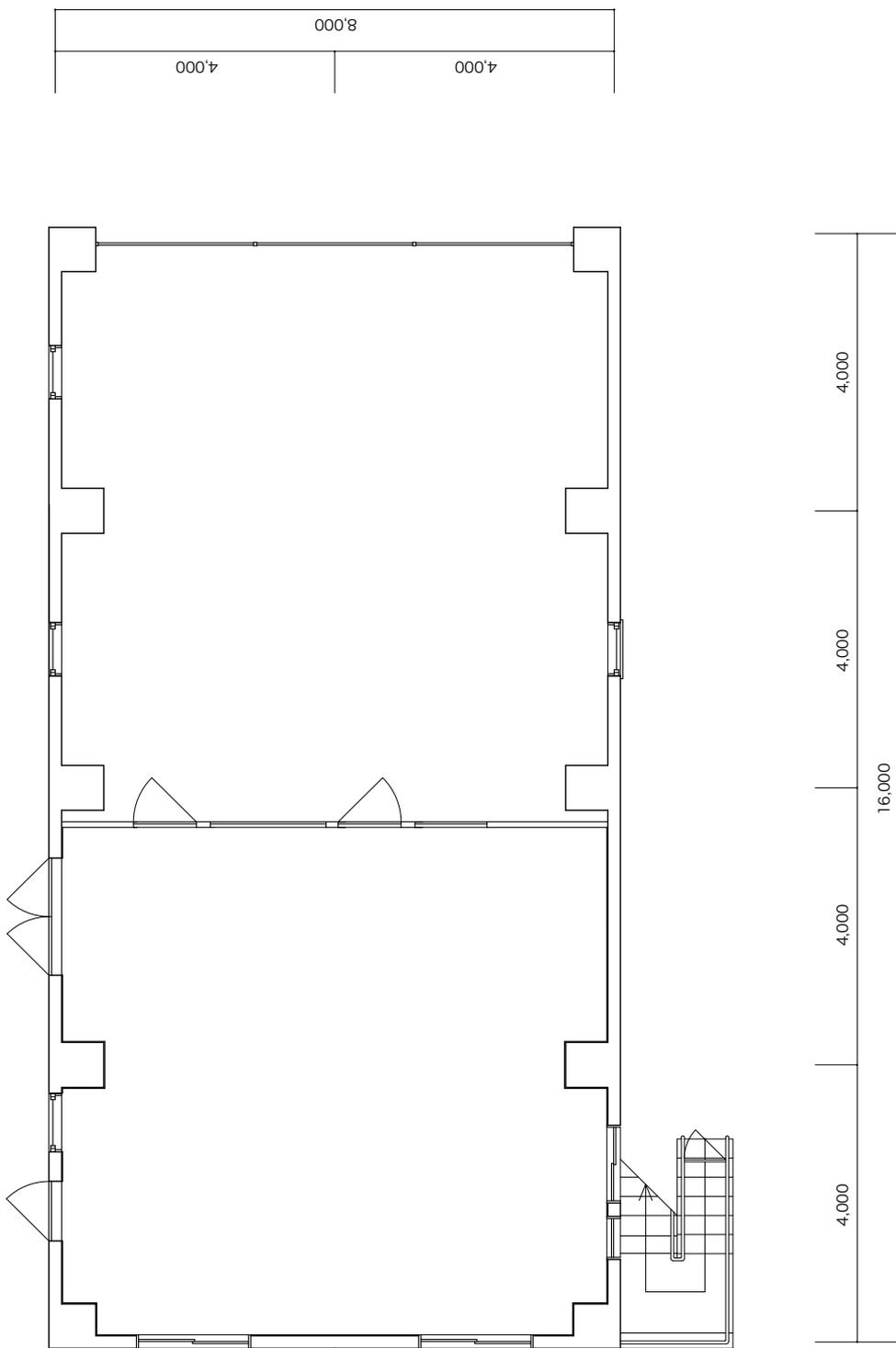
背面図

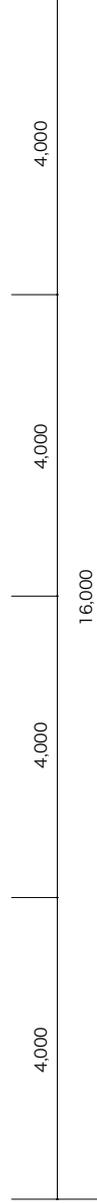
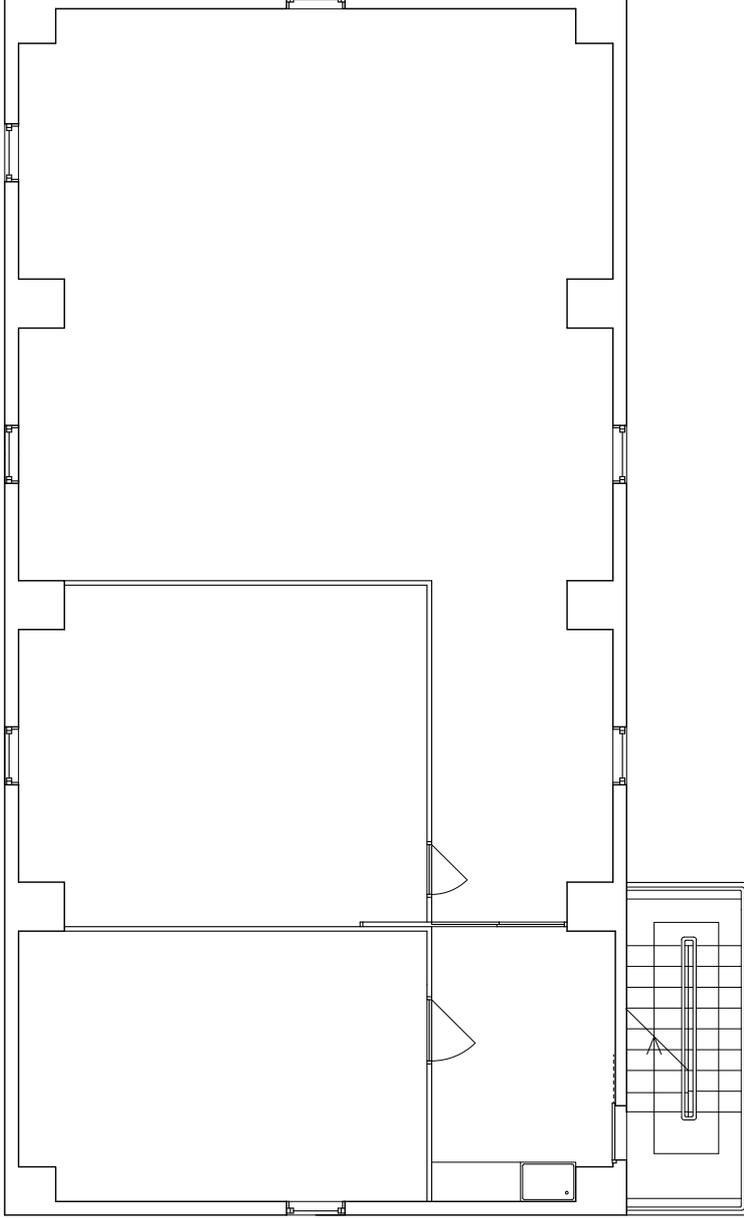
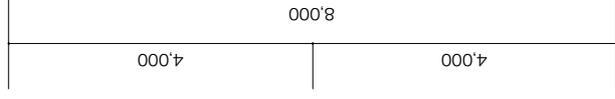
梁間断面図

桁行断面図・東面展開図

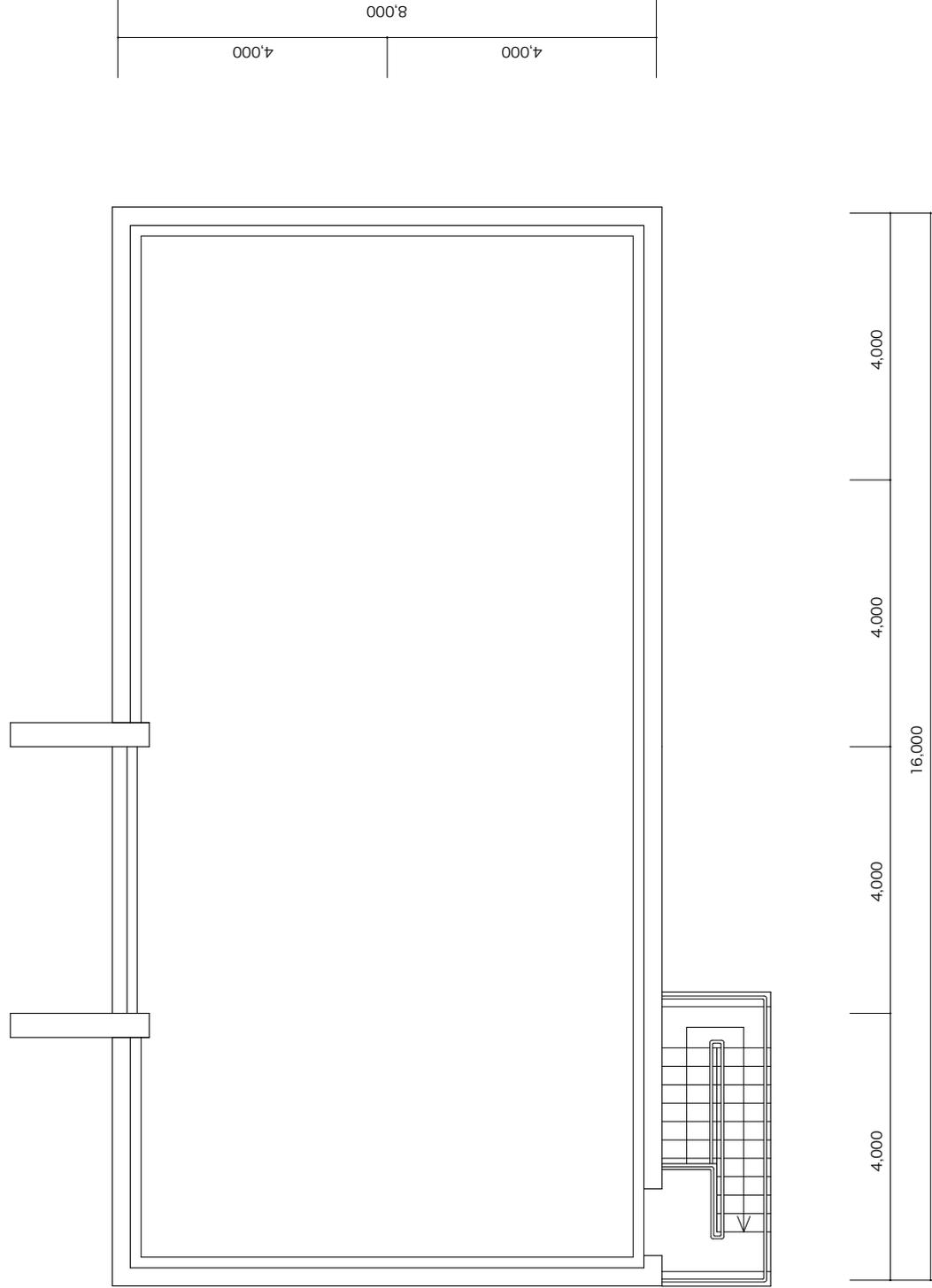
桁行断面図・西面展開図

梁間断面図 2

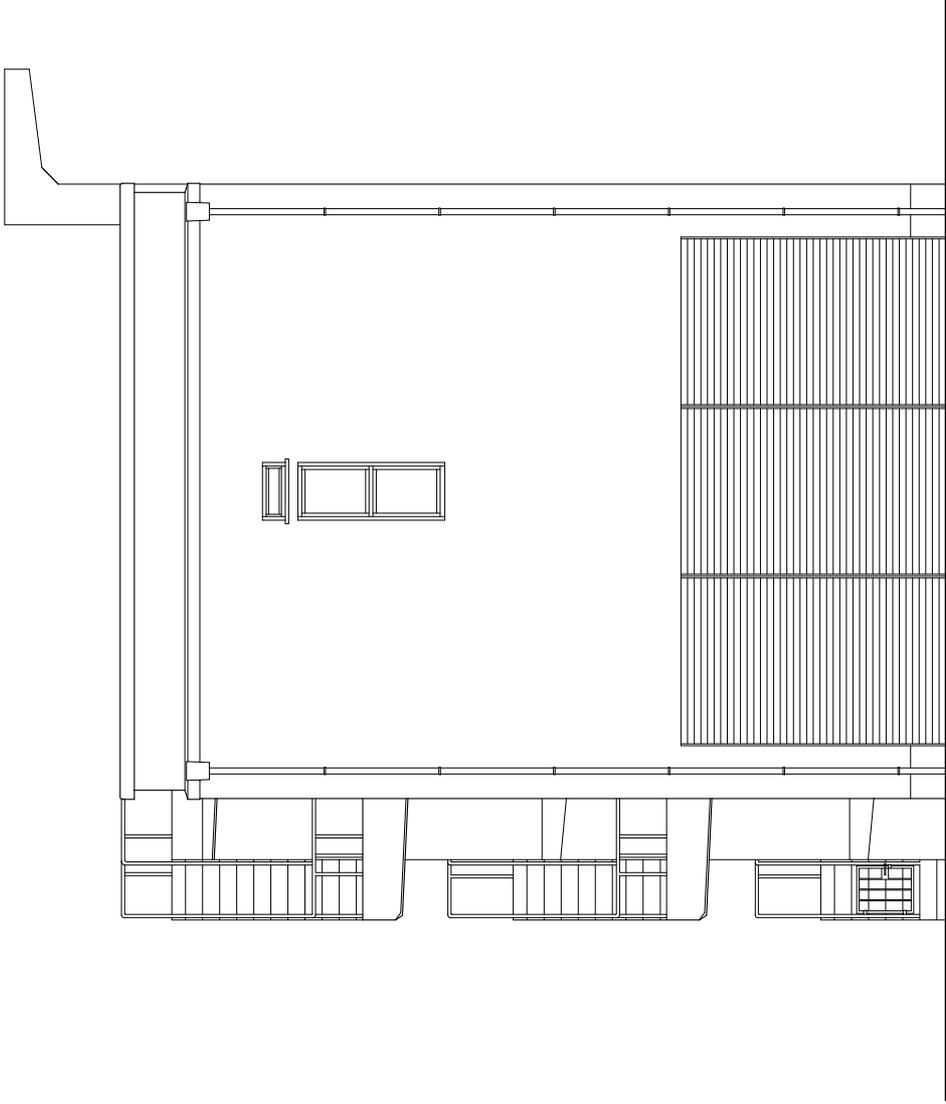




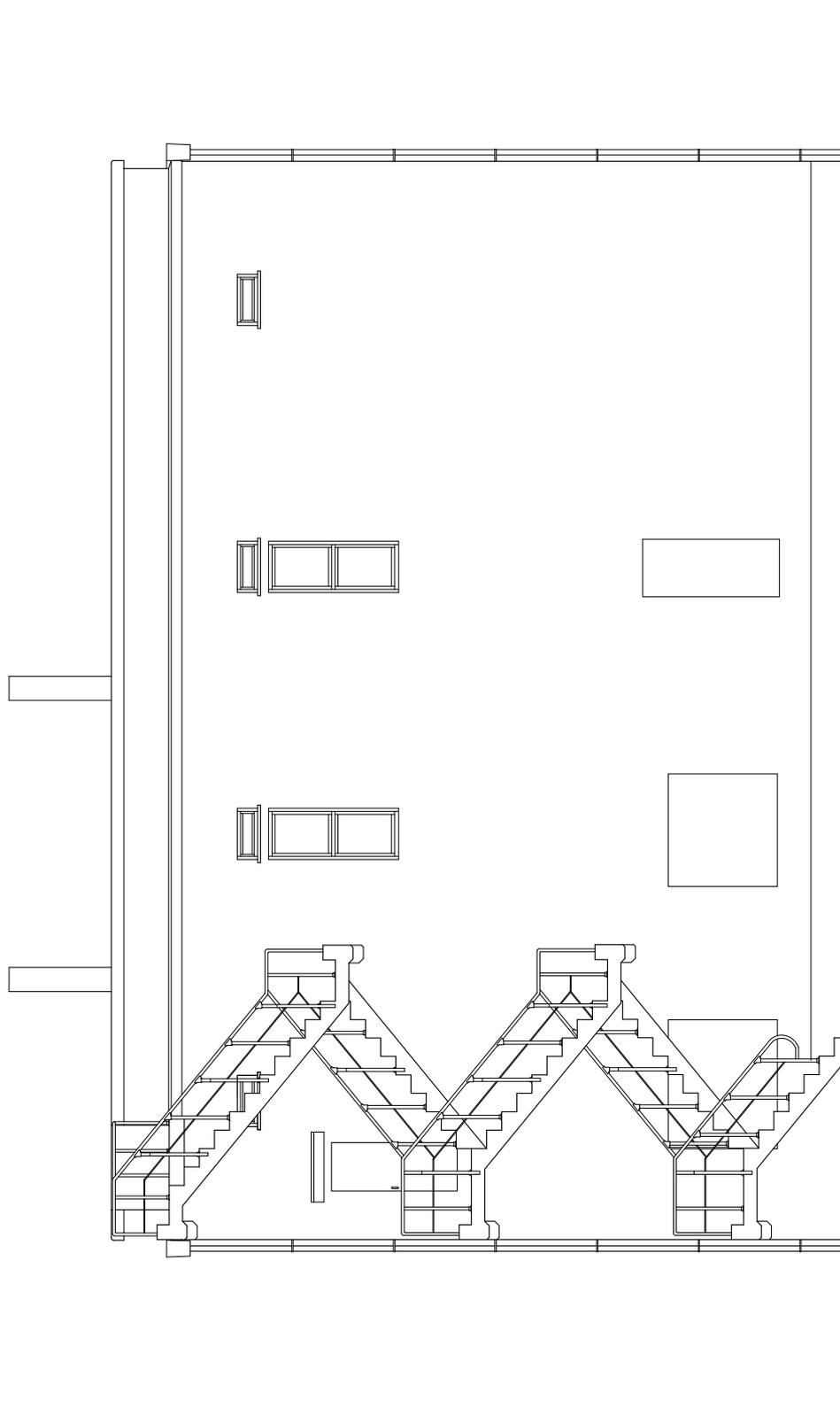
高射砲第2連隊照空予習室
現状 2階平面図 s=100



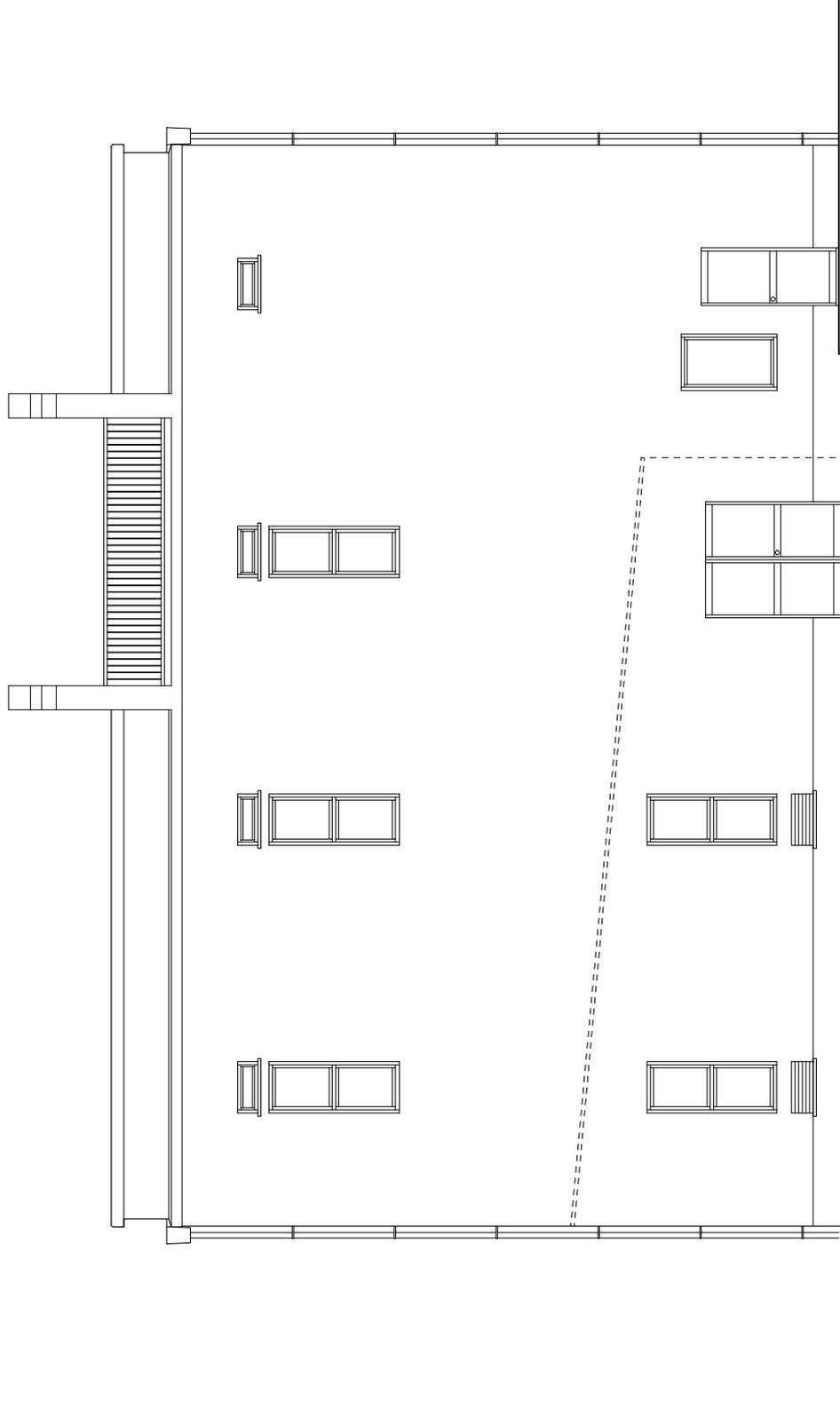
高射砲第2連隊 照空予習室
現状 屋上平面図 S=100



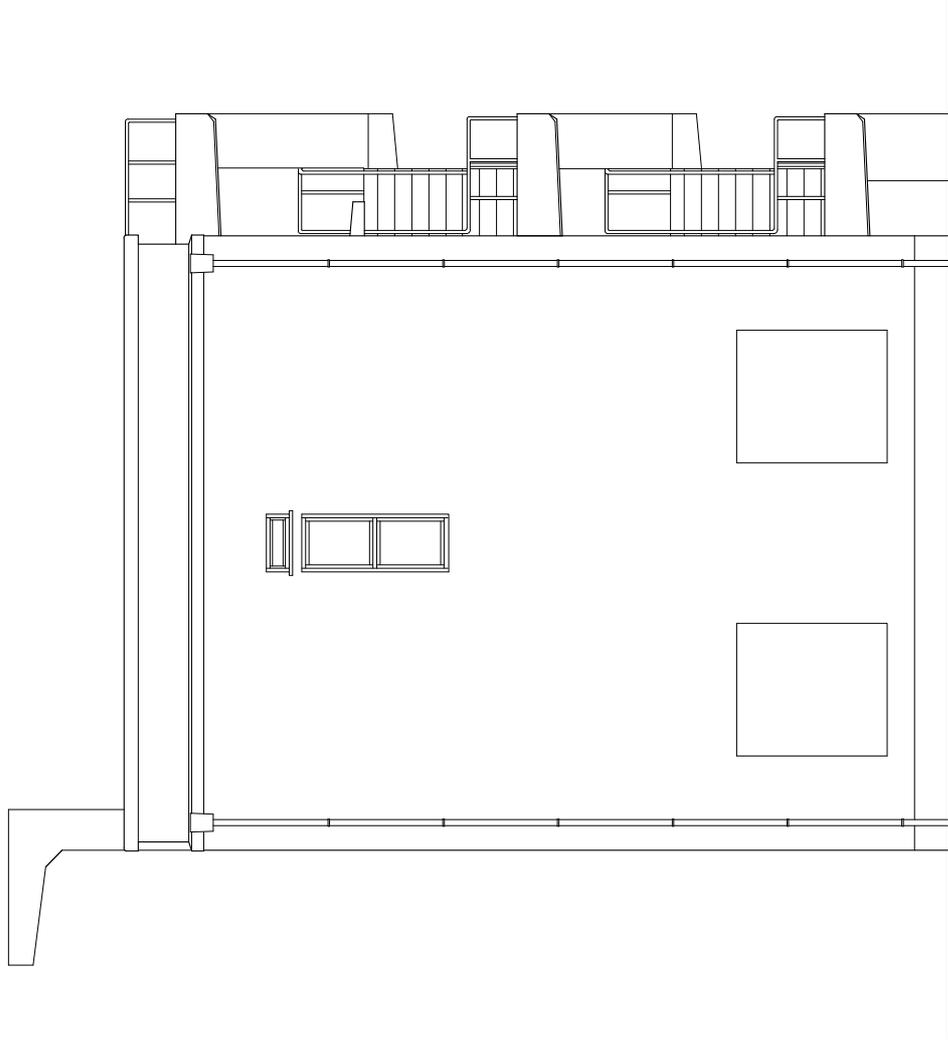
高射砲第2連隊照空予習室
現状 正面図 s=100



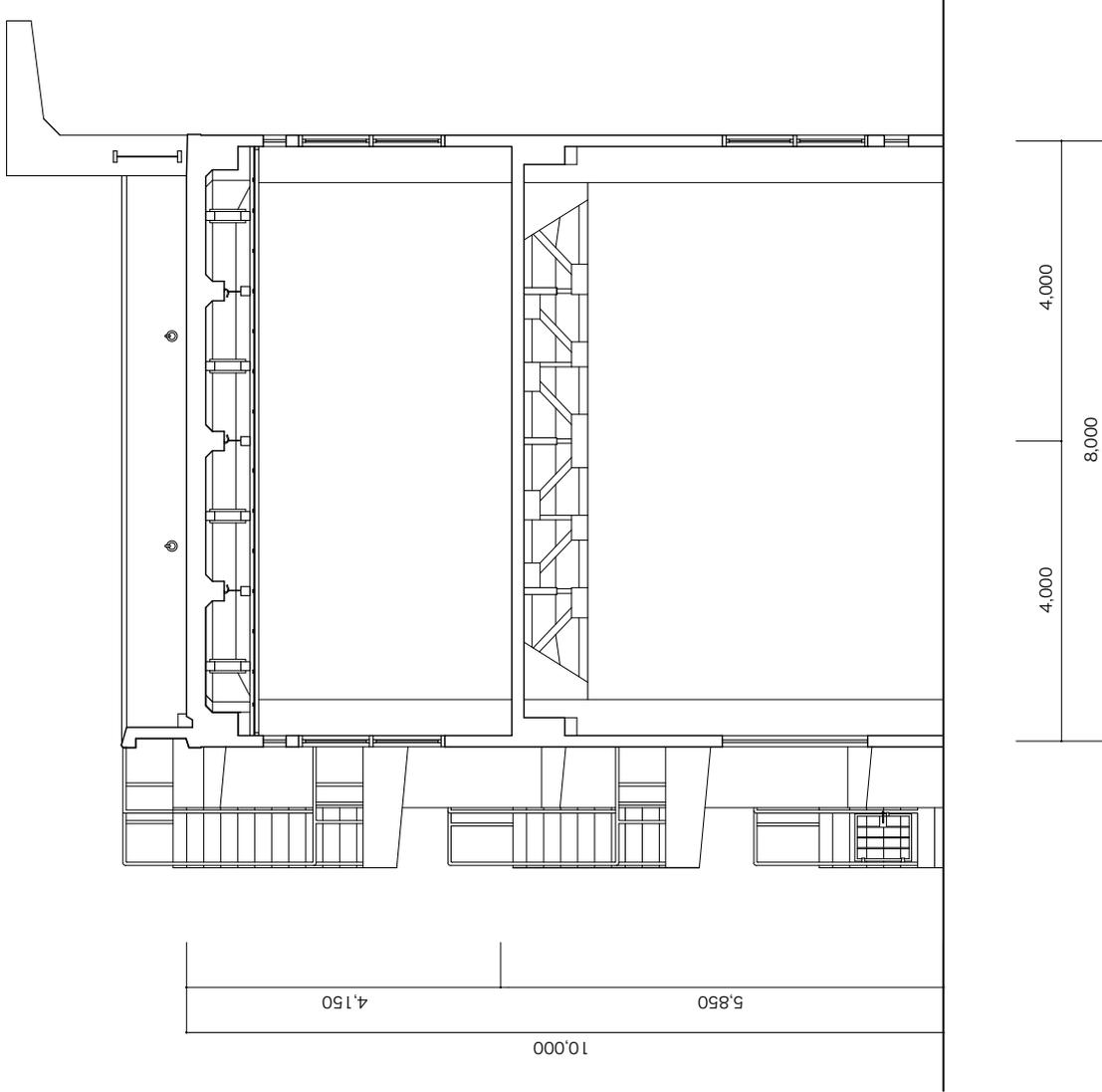
高射砲第2連隊 照空予習室
現状 東立面図 s=100



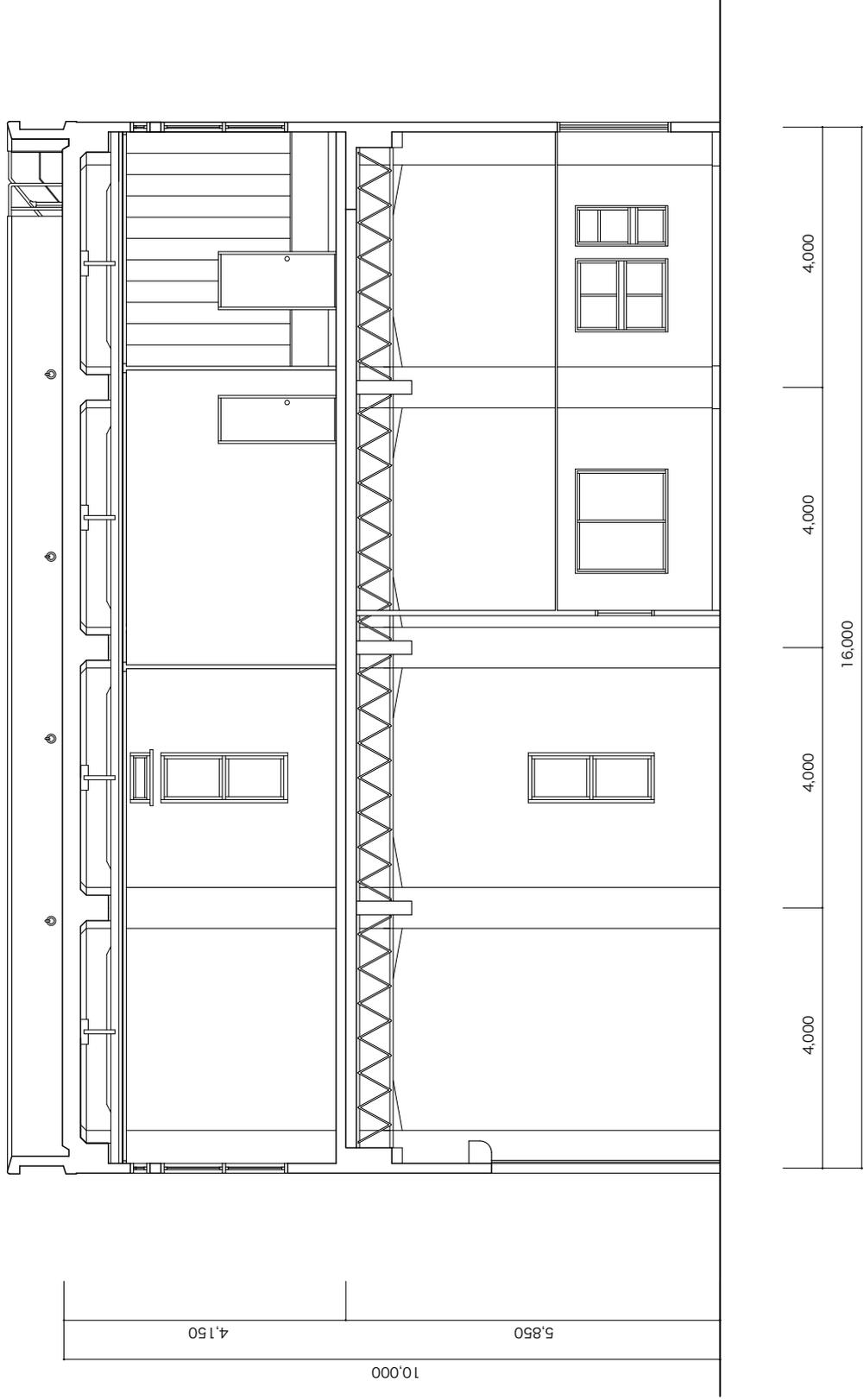
高射砲第2連隊 照空予習室
現状 西立面図 s=100



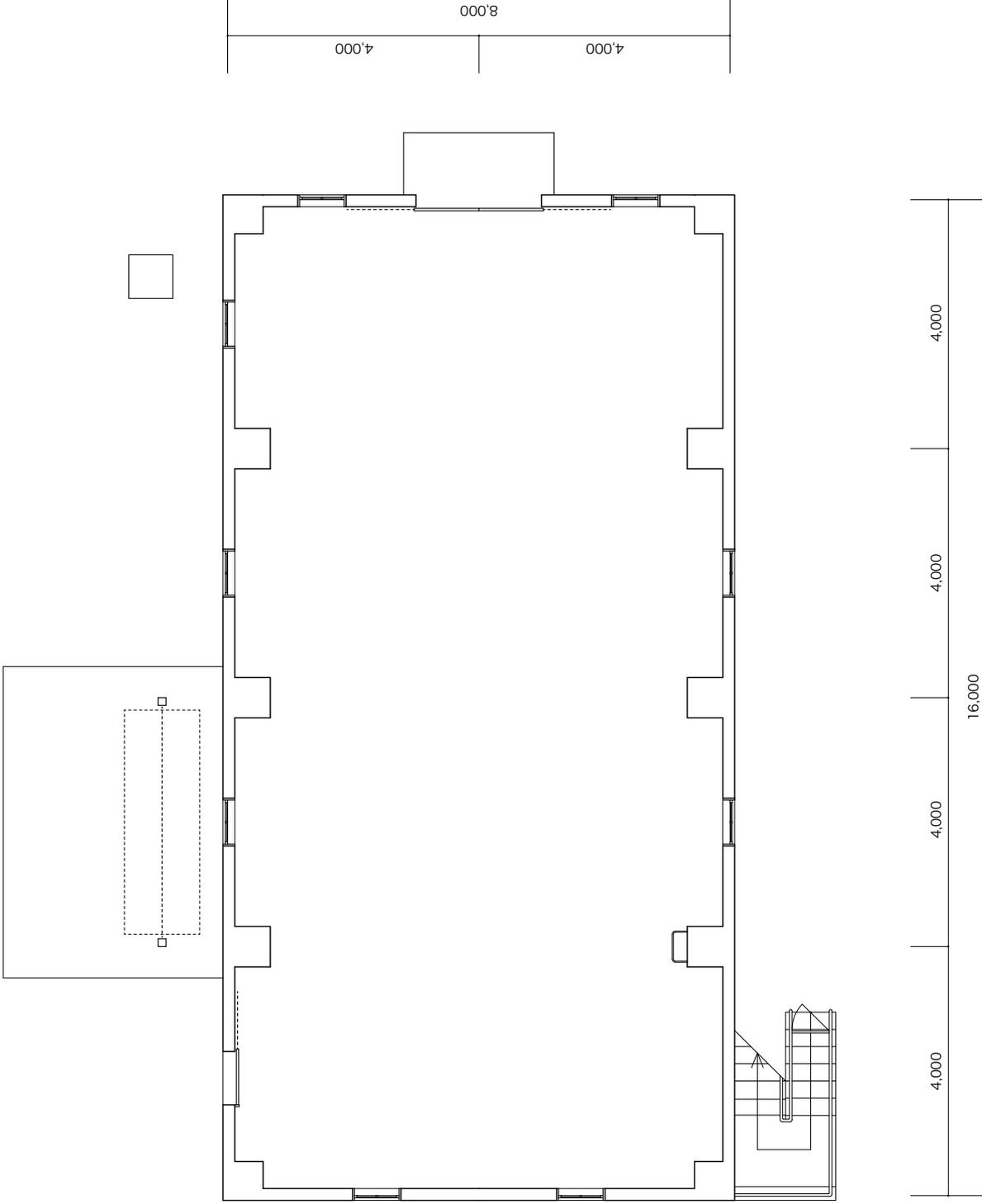
高射砲第2連隊 照空予習室
現状 背面図 s=100



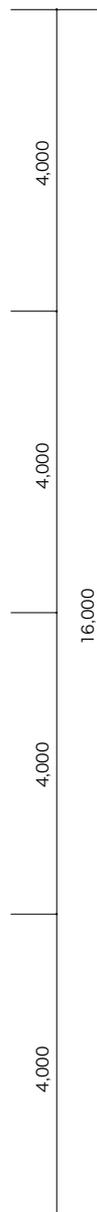
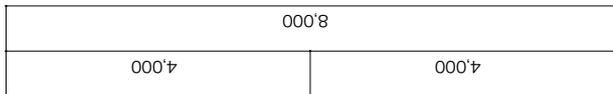
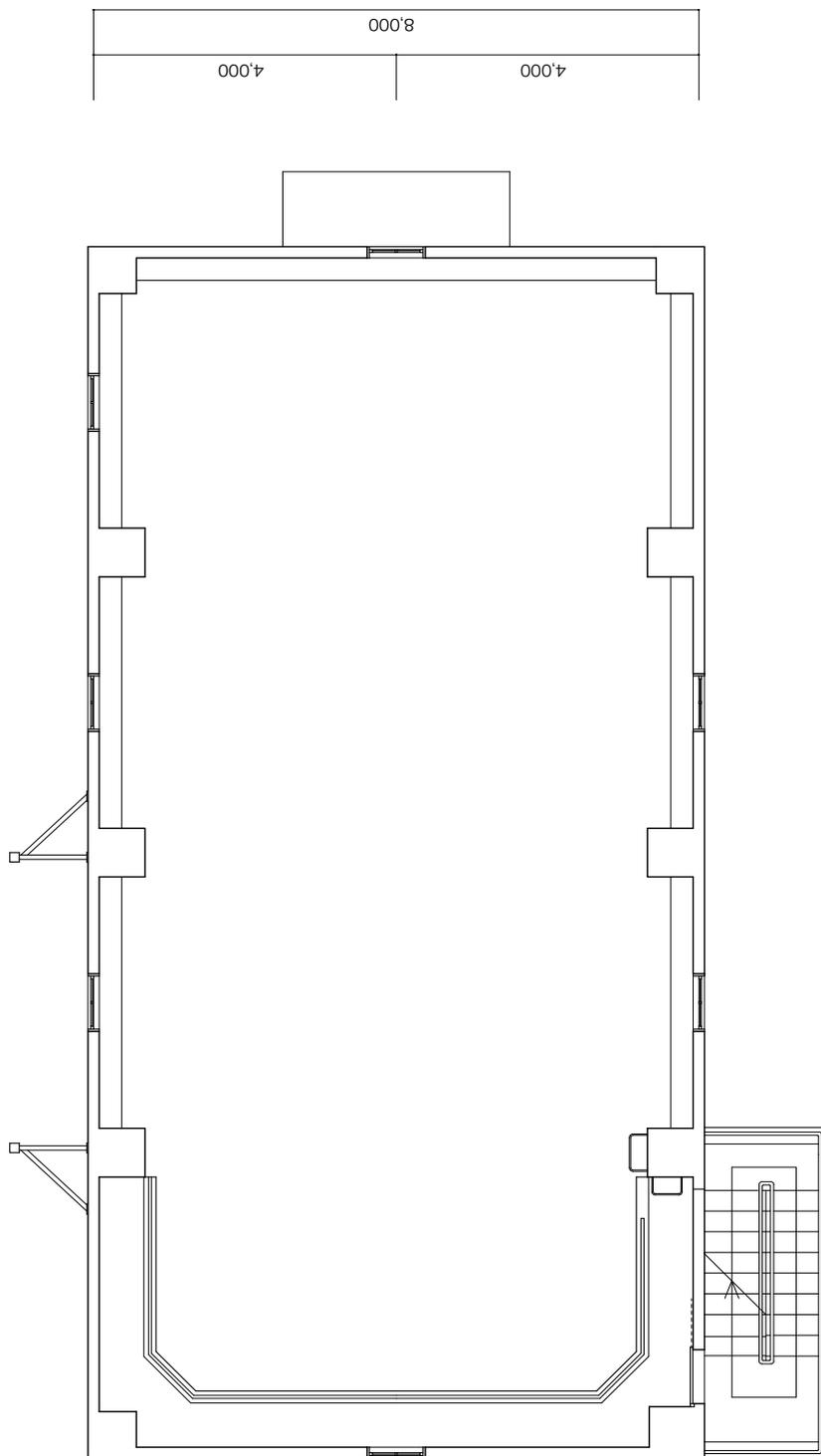
高射砲第2連隊照空予習室
現狀 梁間断面図 s=100



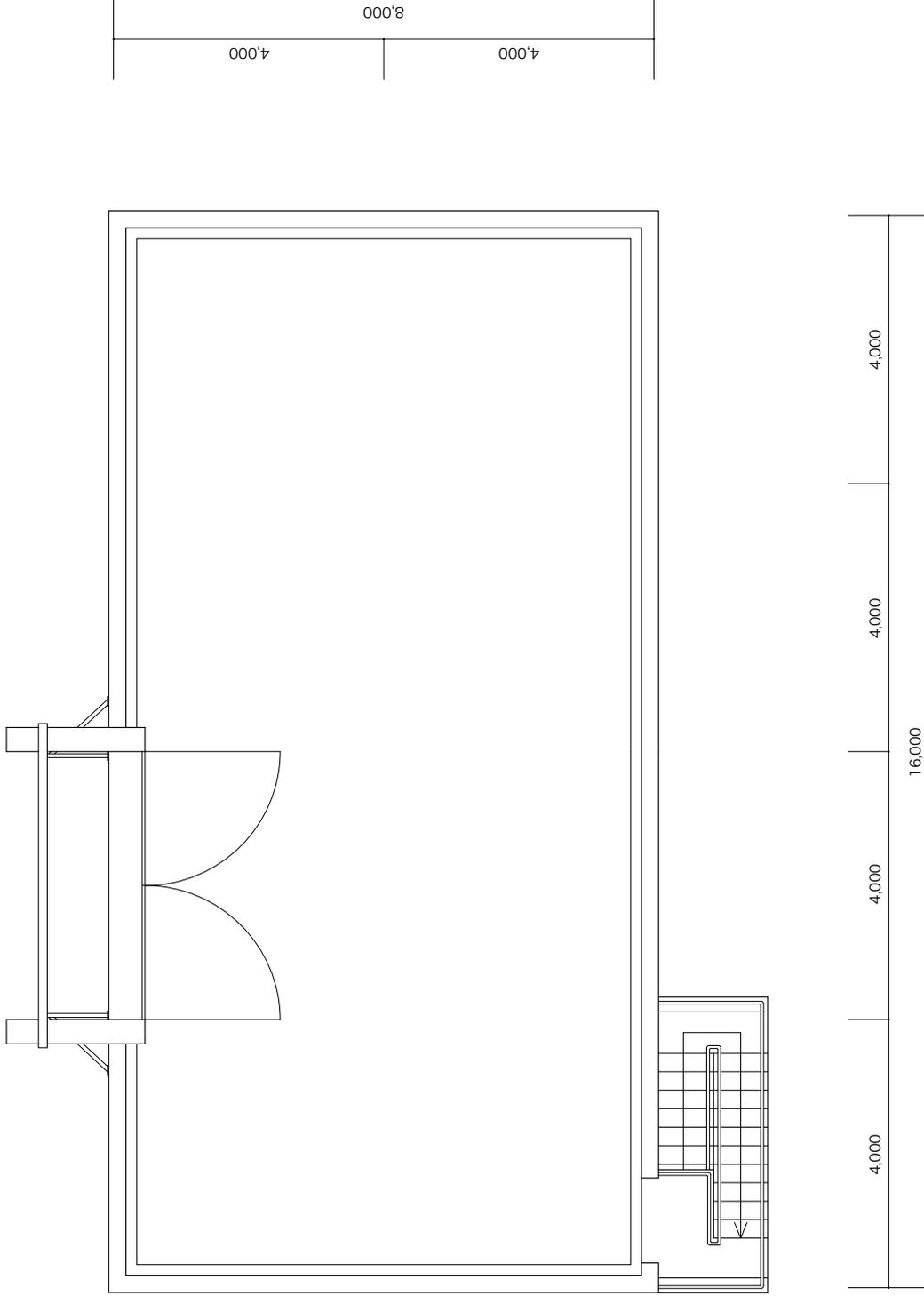
高射砲第2連隊 照空予習室
 現状 桁行断面図 S=100



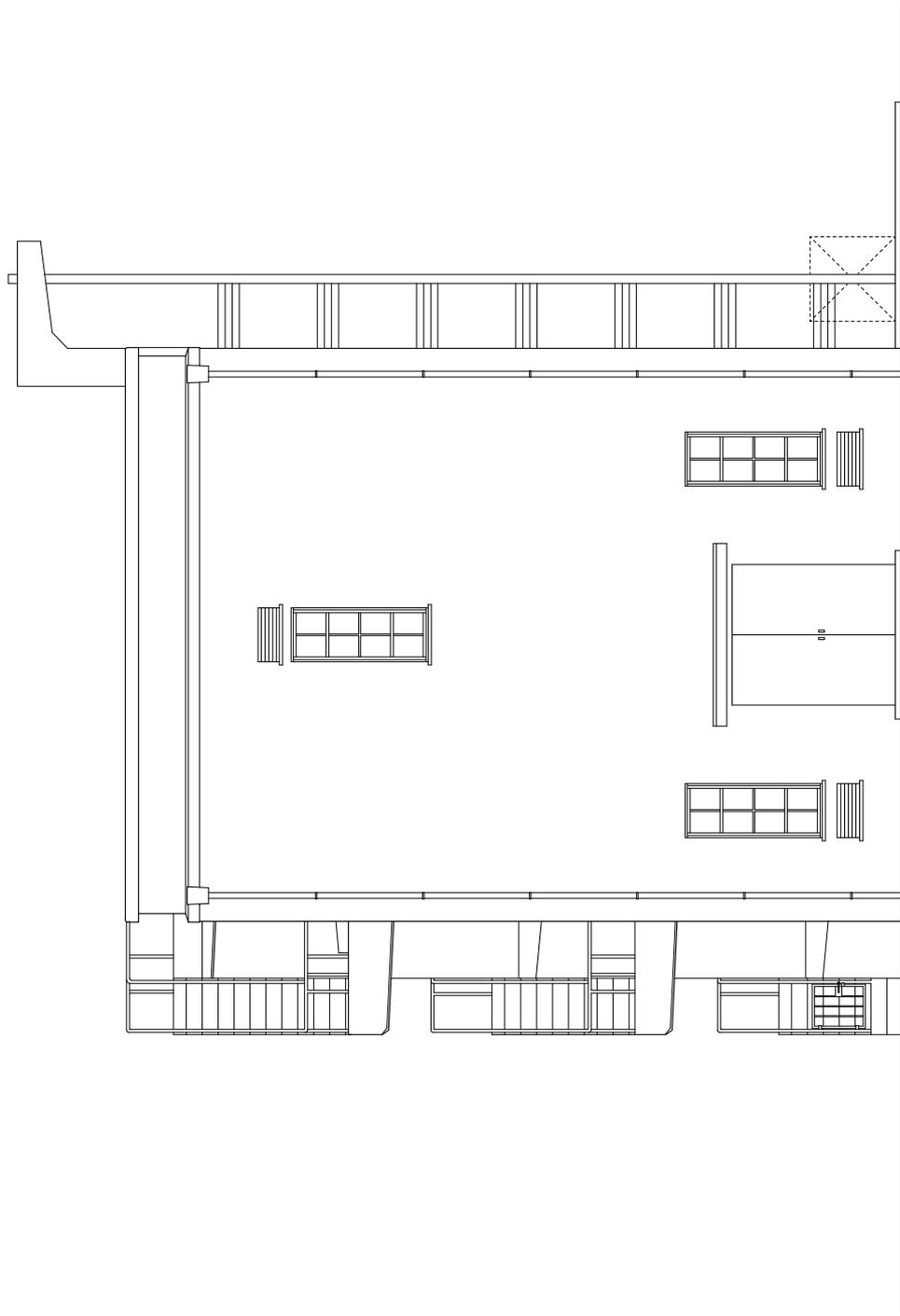
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 1階平面図 s=100



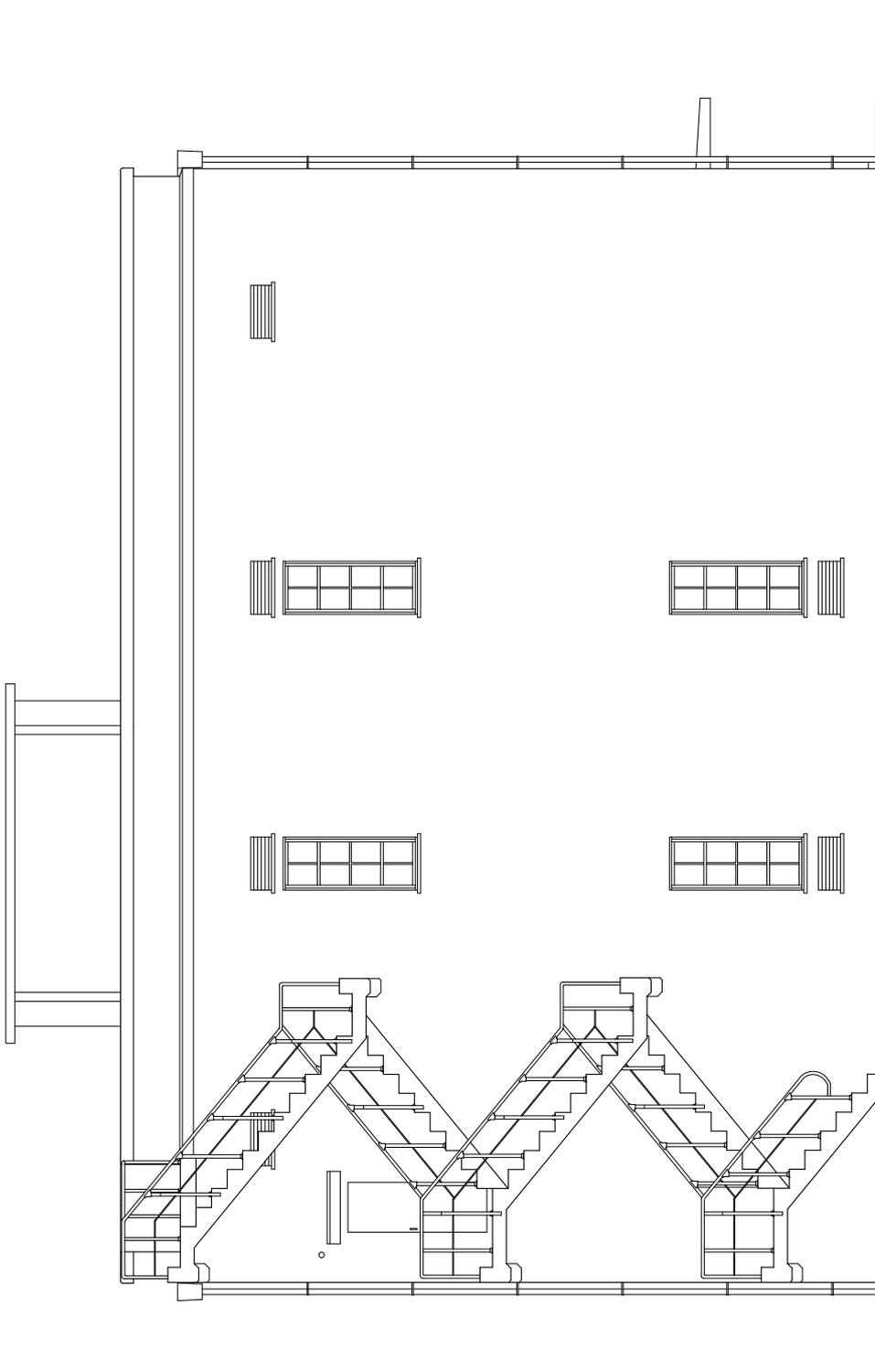
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 2階平面図 S=100



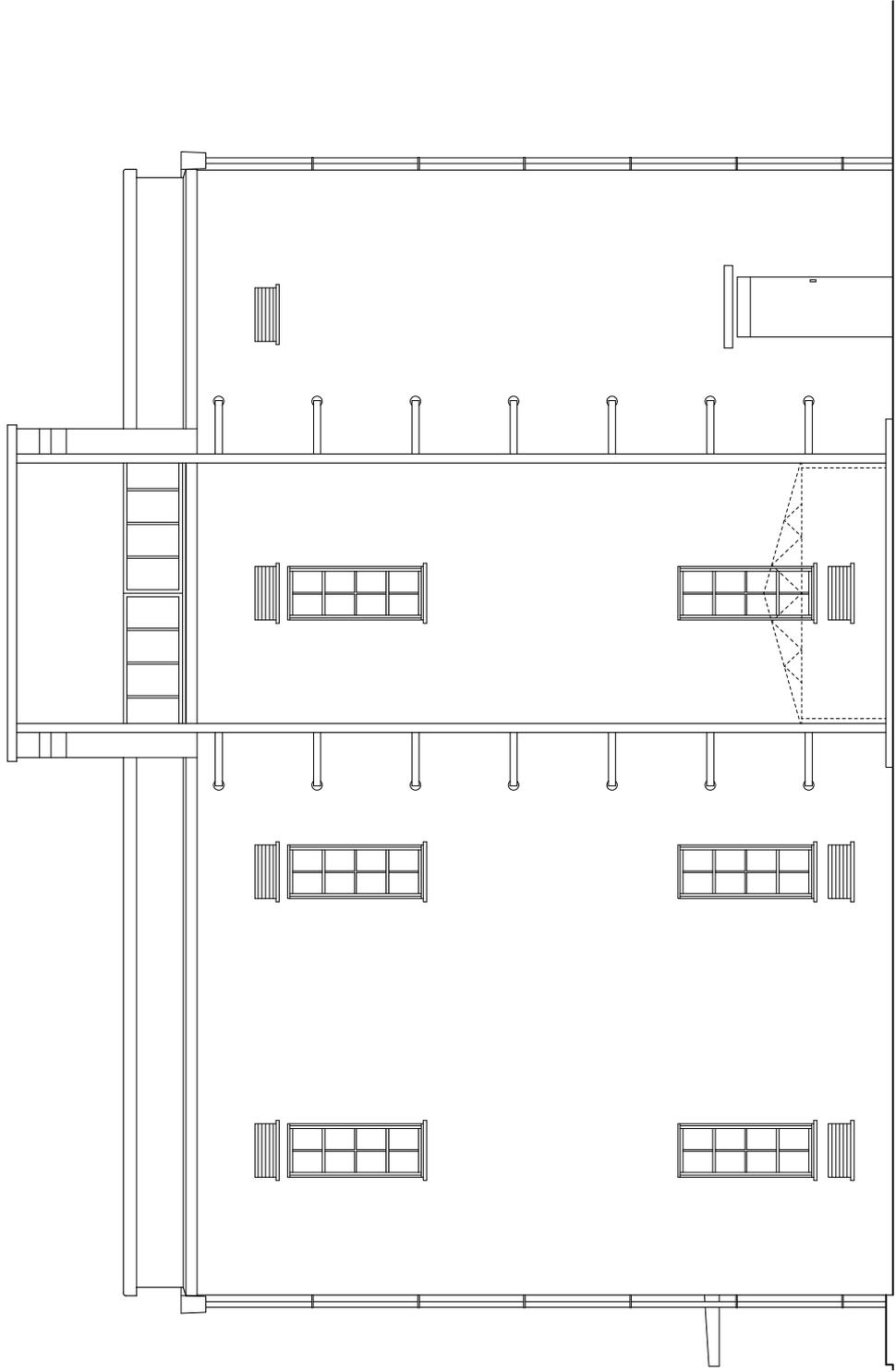
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 屋上平面図 s=100



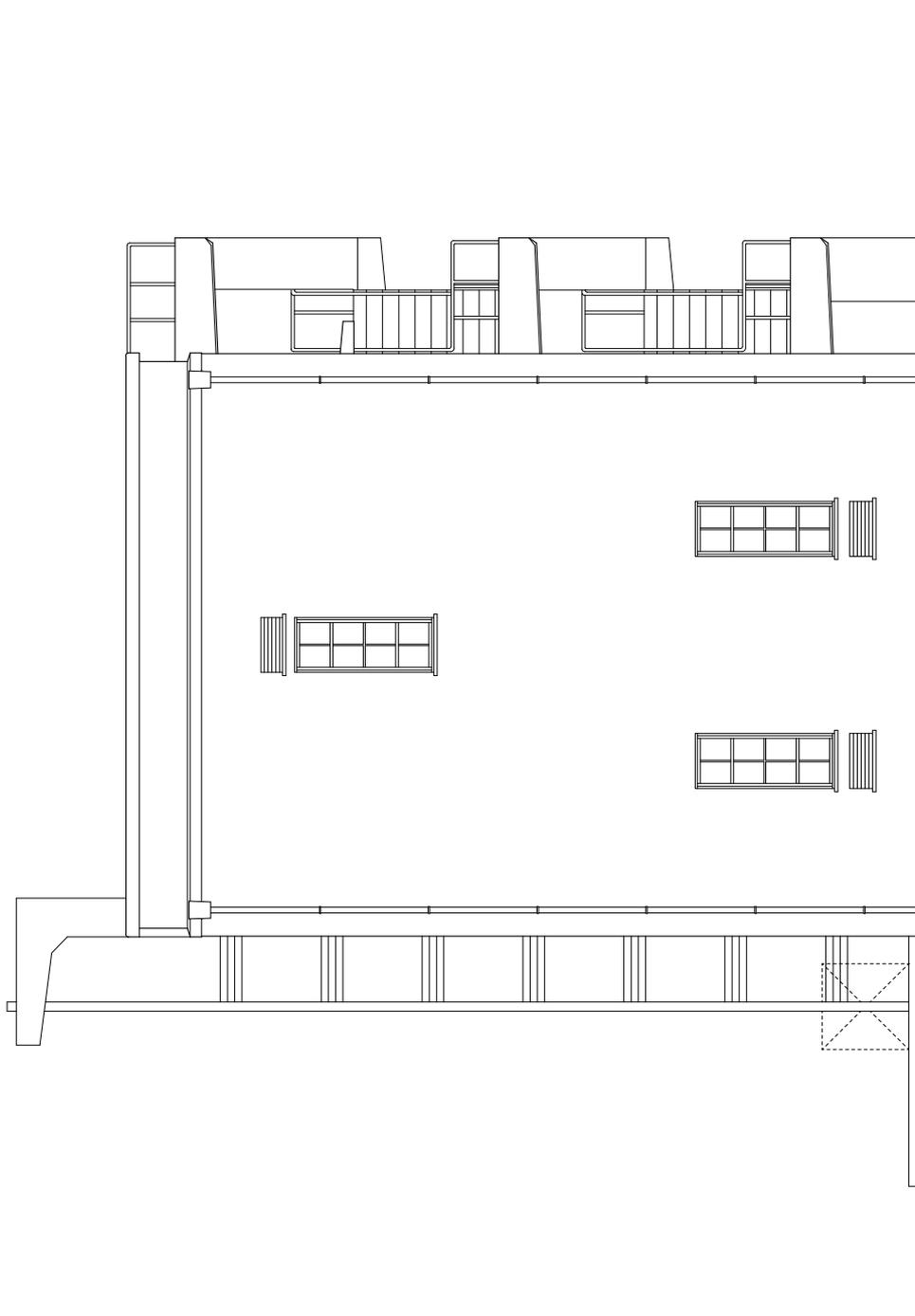
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 正面図 s=100



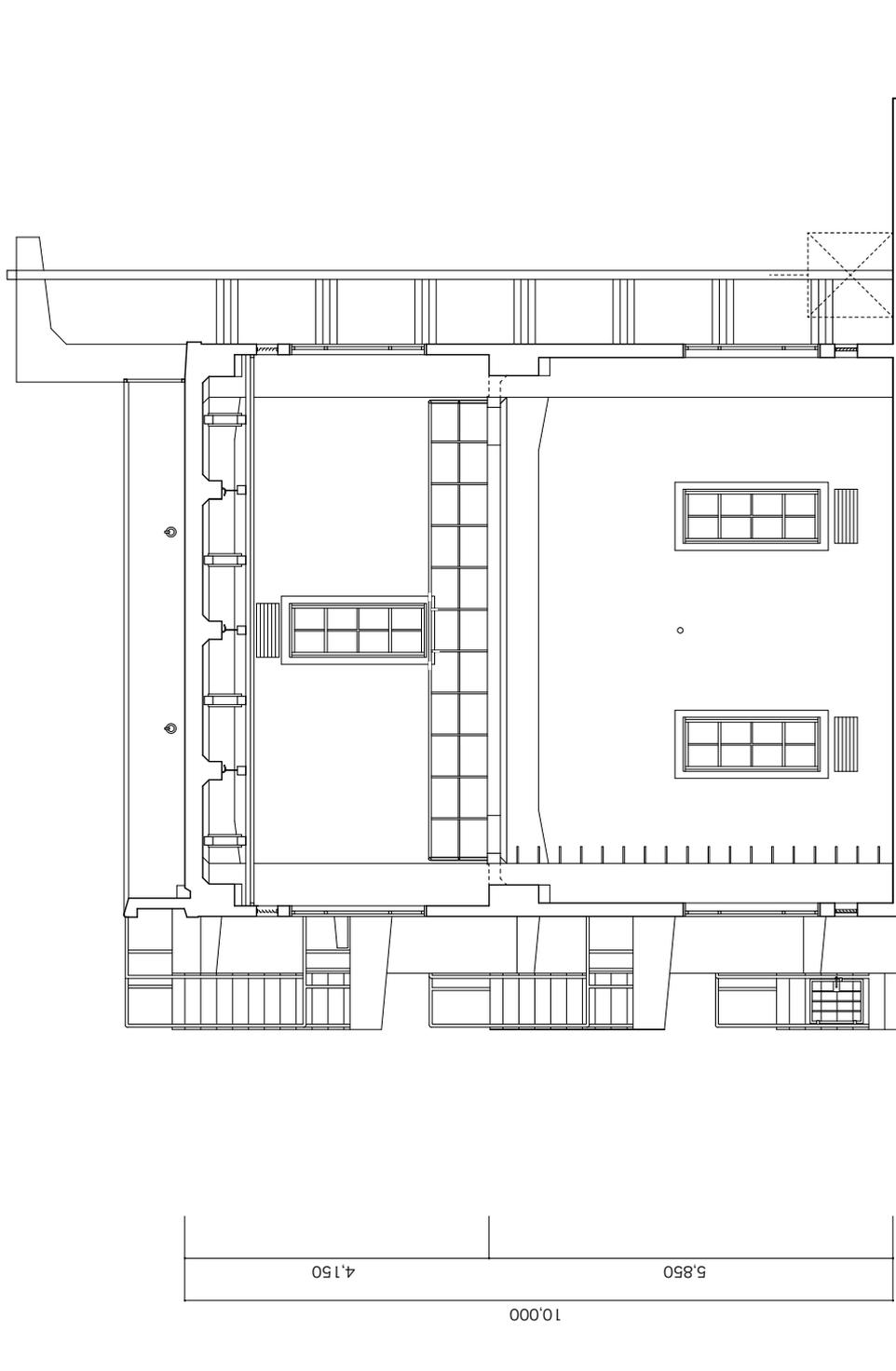
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 東立面図 s=100



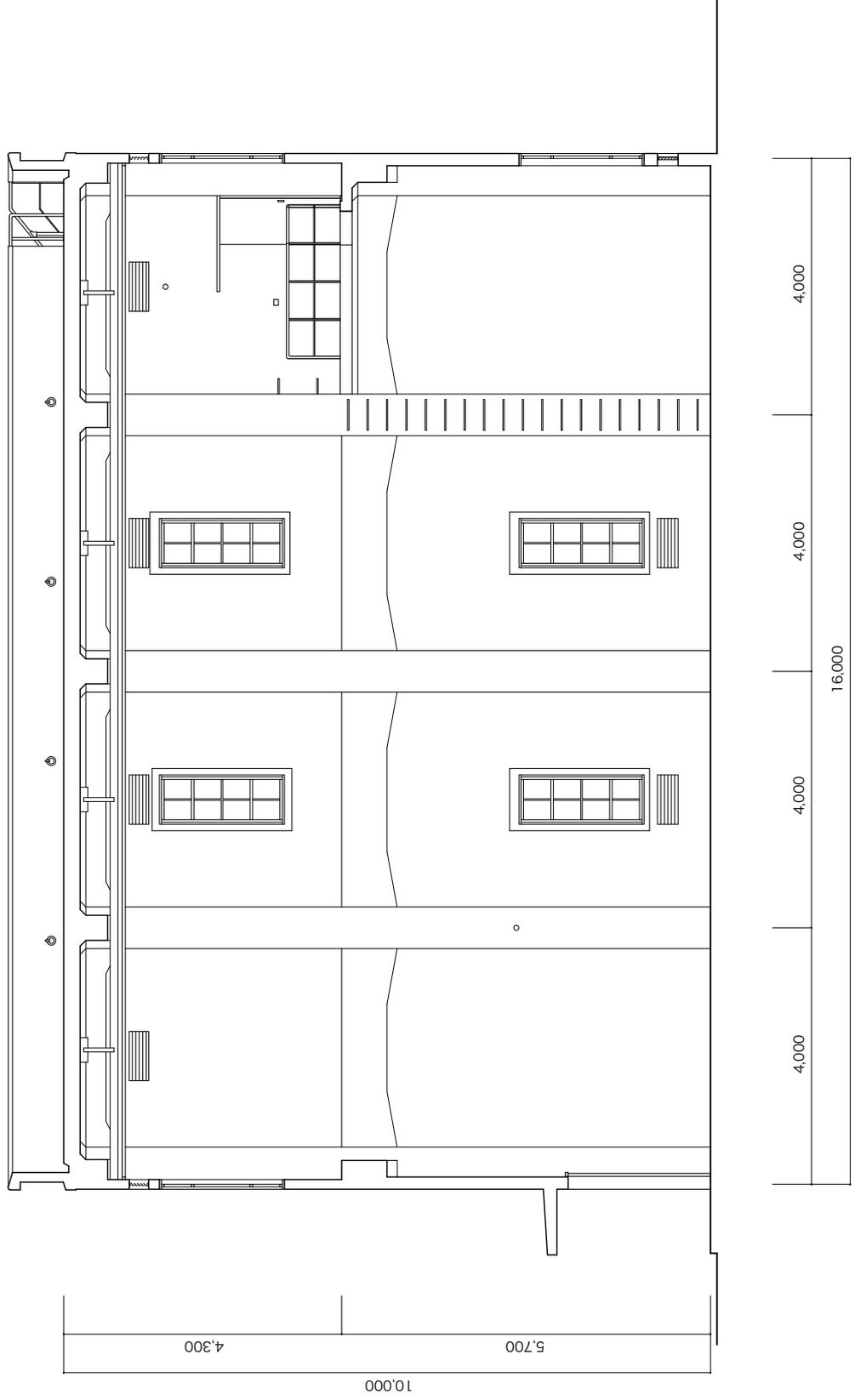
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 西立面図 S=100



高射砲第2連隊照空予習室
復原 背面図 s=100



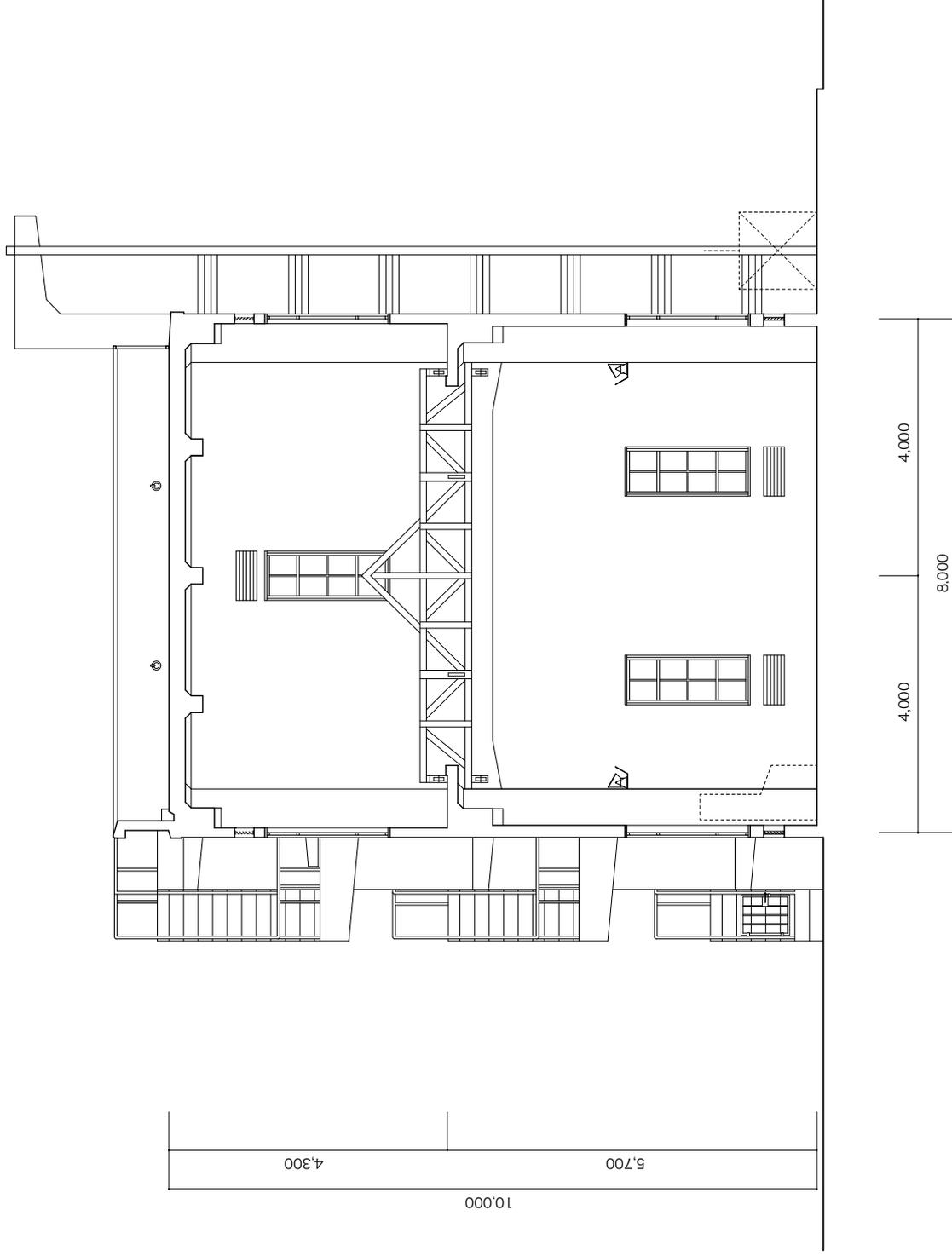
高射砲第2連隊 照空予習室
復原 梁間断面図 S=100



高射砲第2連隊 照空予習室
 復原 桁行断面図・東面展開図
 S=100



高射砲第2連隊 照空予習室
 復原 桁行断面図・西面展開図
 s=100



防空学校で計画されたような映写幕移動装置を設置した場合の梁間断面図。
 実際には回廊は南端の間にしか回されず、導入されなかつたことが判明した。

高射砲第2連隊 照空予習室
 復原 梁間断面図 2 s=100

補遺

軍施設の文化財

近代の建造物調査時にまず当たる文献である、日本建築学会編『新版日本近代建築総覧』（技法堂出版、1980）では柏市は対象に入っていない。千葉県では早くに県独自の近代化遺産調査を実施し、『千葉県の産業・交通遺跡－千葉県産業・交通遺跡実態調査報告書－』（千葉県教育委員会、1998）を刊行しているものの、この「旧分署」は対象になっていない。なお、柏市内の軍事施設については、第3章第1節千葉県産業・交通遺跡一覧に、旧高射砲連隊営門・旧第4航空教育隊（東部第102部隊）

営門・旧陸軍東部第百五部隊営門が掲載されているのみである。また、文化庁事業による全国的な近代化遺産総合調査は、千葉県では未実施である。本調査を機に目を通した軍事遺産・戦跡関係の文献にも、柏と同種の建物は見当たらなかった。

近代の軍事関連建造物の国指定文化財及び登録有形文化財、及び千葉県下の指定文化財の一覧を次ページ以降に掲載する。

国指定及び登録文化財

・重要文化財 昭和期に建設された軍事建物の重要文化財はない。

・史跡 2017年10月に東京都板橋区の陸軍板橋火薬製造所跡が国の史跡に指定された。明治初期に官営工場として設立されてから第二次世界大戦終戦まで火薬の製造が行われ、昭和初期に建てられた鉄筋コンクリート造の施設も複数棟含まれている。他に明治中期の猿島砲台跡がある。

・登録有形文化財（建造物） 国の登録有形文化財の中で、昭和期の建設、すなわち第二次世界大戦時に建てられたものは7件で、すべて鉄筋コンクリート造である。このうち「建築物」に分類されるのは旧陸軍知覧飛行場弾薬庫のみである。他は、「その他構造物」とされるもの。但し、旧東京第二陸軍造兵廠深谷製造所給水塔は高さが18メートルあり、構造が柏の照空予習室と似通っている。

実用面に重きを置いて建てられた装飾の少ない軍用建物は、文化財として認識されにくく、これらの意味合いが確認される前に失われがちである。

千葉県下の指定文化財（県指定・市町村指定）

千葉市の千葉経済学園内にある旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築（明治時代末築、煉瓦造）が、比較的早い昭和63年（1988）に県指定文化財となっている。市町村指定の一部は史跡の区分ながらも建造物を含むものを含めた。

※ 文化庁「国指定文化財等データベース」他報道による。軍用水道・港湾施設や屯田兵・軍人の住宅・凱旋門等は含まない。該当する千葉県下の市町村の指定文化財については、千葉県教育庁教育振興部文化財課のご教示による。都道府県、市町村指定物件について他の都道府県は未確認。（2018年3月現在）

国 重要文化財等

名 称	建築年代	構造	都道府県
旧旭川偕行社	明治末	木造	北海道
旧弘前偕行社	明治末	木造	青森県
旧近衛師団司令部庁舎	明治末	煉瓦造	東京都
旧金澤陸軍兵器支廠（石川県立歴史博物館）第五號兵器庫	明治末	煉瓦造	石川県
旧金澤陸軍兵器支廠（石川県立歴史博物館）第六號兵器庫	大正	煉瓦造	石川県
旧金澤陸軍兵器支廠（石川県立歴史博物館）第七號兵器庫	大正	煉瓦造	石川県
舞鶴旧鎮守府倉庫施設 舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫	明治末	鉄骨煉瓦造	京都府
舞鶴旧鎮守府倉庫施設 舞鶴海軍兵器廠予備艦兵器庫	明治末	煉瓦造	京都府
舞鶴旧鎮守府倉庫施設 舞鶴海軍兵器廠彈丸庫並小銃庫	明治末	煉瓦造	京都府
舞鶴旧鎮守府倉庫施設 舞鶴海軍兵器廠雜器庫並預兵器庫	明治末	煉瓦造	京都府
舞鶴旧鎮守府倉庫施設 舞鶴海軍需品庫需品庫 3 棟	明治末	煉瓦造	京都府
旧善通寺偕行社	明治末	木造	香川県
旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設 無線塔	大正	鉄筋コンクリート造	長崎県
旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設 電信室	大正	鉄筋コンクリート造	長崎県
旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設 油庫	大正	鉄筋コンクリート造	長崎県
東京湾要塞跡 猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡 [史跡]	明治中	—	神奈川県
陸軍板橋火薬製造所跡 [史跡]	昭和前迄	—	東京都
坂東俘虜收容所跡 [史跡指定答申]	大正	—	徳島県

国 登録有形文化財（建造物）

名 称	建築年代	構造	都道府県
あさでん春光整備工場（旧陸軍第七師団騎兵第七連隊覆馬場）	明治末	煉瓦造	北海道
旧第八師団長官舎（弘前市長公舎）	大正	木造	青森県
旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第一棟	明治末	木造	岩手県
旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第三棟	明治末	木造	岩手県
旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第二棟	明治末	木造	岩手県
宇都宮中央女子高校赤レンガ倉庫（旧第六十六歩兵連隊倉庫）	明治末	煉瓦造	栃木県
旧東京第二陸軍造兵廠深谷製造所給水塔	昭和前	鉄筋コンクリート造	埼玉県
旧陸軍演習場内圍壁	昭和前	鉄筋コンクリート造	千葉県
千葉工業大学通用門（旧鉄道第二連隊表門）	大正	煉瓦造	千葉県
石川県庁舎石引分室（旧陸軍金沢偕行社）	明治末	木造	石川県
石川県庁舎石引分室（旧陸軍第九師団司令部庁舎）	明治末	木造	石川県

名 称	建築年代	構造	都道府県
石川県立美術館広坂別館（旧陸軍第九師団長官舎）	大正	木造	石川県
山梨大学赤レンガ館	明治末	煉瓦造	山梨県
旧松本歩兵第五十連隊糧秣庫（信州大学医学部資料室）	明治末	煉瓦造	長野県
愛知大学旧本館（旧陸軍第15師団司令部庁舎）	明治末	木造	愛知県
乃木倉庫	明治初	煉瓦造	愛知県
明治村歩兵第六聯隊兵舎	明治初	木造	愛知県
旧北伊勢陸軍飛行場掩体	昭和前	鉄筋コンクリート造	三重県
姫路市立美術館（旧第十師団兵器庫）	明治末	煉瓦造	兵庫県
鳥根県立浜田高等学校第二体育館（旧歩兵第21連隊雨覆練兵場）	大正	煉瓦造	鳥根県
浜田市立第一中学校屋内運動場（旧歩兵第21連隊雨覆練兵場）	明治末	煉瓦造	鳥根県
岡山県総合グラウンドクラブ（旧岡山偕行社）	明治末	木造	岡山県
岡山大学情報展示室（旧陸軍第十七師団司令部衛兵所）	明治末	木造	岡山県
呉市入船山記念館旧高鳥砲台火薬庫	明治末	石造	広島県
安藝家バラック（旧板東俘虜収容所）	大正	木造	徳島県
柿本家バラック（旧板東俘虜収容所）	大正	木造	徳島県
旧陸軍第一一師団兵舎棟	明治中	木造	香川県
佐世保市民文化ホール（旧海軍佐世保鎮守府凱旋記念館）	大正	鉄筋コンクリート造	長崎県
旧佐伯海軍航空隊掩体壕	昭和前	鉄筋コンクリート造	大分県
旧陸軍知覧飛行場弾薬庫	昭和前	鉄筋コンクリート造	鹿児島県
旧陸軍知覧飛行場着陸訓練施設鎮礎	昭和前	鉄筋コンクリート造	鹿児島県
旧陸軍知覧飛行場防火水槽	昭和前	鉄筋コンクリート造	鹿児島県

千葉県 県指定・市町村指定文化財

名 称	建築年代	構造	県市町村
旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築	明治後	煉瓦造	県指定
松戸中央公園正門門柱（旧陸軍工兵学校正門門柱）	大正	煉瓦造	松戸市
旧陸軍工兵学校歩哨哨舎	昭和前	コンクリート造	松戸市
掩体壕〔史跡〕	昭和前	コンクリート造	印西市
館山海軍航空隊赤山地下壕跡〔史跡〕	昭和前	—	館山市
特攻機 桜花四三乙型 行川基地跡〔史跡〕	昭和前	—	いすみ市
大房岬要塞群〔史跡〕	昭和前迄	—	南房総市

海外に見る先行事例

本研究では、照空予習室の見本となった施設を追求するまでは及ばなかった。複雑な電気式・機械式装置には、先行例を参考にして開発が行われたと想像される。海外には室内で射撃・爆撃演習をする様々な施設が見られ、参考まで欧米の第二次世界大戦後時の事例を数点紹介する。

・ Langham Dome 高射砲射撃訓ドーム

2014年に修復を終えて公開されている英国のLangham Dome (1942- 築、英国ノーフォーク)は、プラネタリウムのような半球の構造の内側に飛行機の映像を音響効果とともに投影して、高射砲で敵機を撃つ訓練が行われた。

・ Turret trainer あるいは turret instructional building 回転砲塔射撃訓練棟

イギリス空軍 (RAF) Stanton Harcourt turret trainer (1940 築、英国オックスフォードシャー) 専用建物内に、直径7m弱の骨組にプラスター塗をした半球のスクリーンが立ち上がり、ここに標的の映像を投影し、射撃精度を高める訓練をした。建物の突出部に回転砲塔用の動力を納めた。

・ Vickers-Bygrave Bombing Teacher 爆撃訓練機

上空からの爆撃訓練用、建物の外観は高射砲予習室に似ている。室内上方から地形を投影し、移動することによってあたかも飛行機で上空を飛んでいるように見せかける。訓練を受ける者は下方で、指示された標的を撃つ。上は商品名で、最新の設備として紹介されている。

(英) Flight International Magazine (1934-05-03) pp434-435

・ Waller Gunnery Trainer 射撃訓練機

米国ではパノラマ状のスクリーンに画像を投影し、あたかもシミュレーションゲームのように訓練する装置があった。映写機5台と球面状のスクリーンを用いて投影する装置。使用時に熱を発生するので、夏期には部屋を空調する必要もあったという。戦後にこの技術は、映画のシネラマへと発展する。

William Crist "Movies Train Air Gunners: Flyers Blast Phantom Planes in Battle Practice" (米) Popular Science (Sept 1943) pp65-68

調査方法についての所感

本文で触れたように、個人のブログに高射砲第1連隊の絵葉書が公開されてなければ、柏の建物の当初の姿を想像することもできず、旧分署の現況図面を作成しただけで、建物は予定通り取り壊されていたかもしれない。

インターネットを最大限に活用して行ったことも初めての経験となった。本調査を開始してからの数年間でも、画面が操作しやすくなったところが多い。

防衛研究所に所蔵されている陸軍史料は本調査の要となる情報源である。アジア歴史資料センターのサイトを通して、史料を探し、閲覧できる環境があつてこそ、可能となった研究であると感じている。同時に、各地の各時代の航空写真も国土地理院によって公開されており、自由自在に時代を追って地域の変遷、建物の取り壊しや建て替えを確認することができる。さらには行ったことのない土地でも、地図上に降りたつてあたかも通りを歩くかのようにして、建物が現存するかどうかを確認するような使い方があつたとは発見であつた。

このように事前に得た情報にもとづき研究調査の枠組をかたちづくり、各地で組織が所蔵する史料や図書館の文献を調べて肉づけをしていった。10年前であればできなかつたであろう、まさにいまどきの調査方法をとる結果となつた。

参考文献

全般

偕行社編『兵器器材 砲兵沿革史 第3巻』偕行社、1962

財団法人偕行社砲兵沿革史刊行会編『戦法・戦技及び其の教育 砲兵沿革史 第2巻下』、財団法人偕行社、1965

『本土防空作戦』防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社、1968

渡辺洋二『本土防空戦』朝日ソノラマ、1982

十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房、2002

十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典 続』柏書房、2003

戦争遺跡保存全国ネットワーク『戦争遺跡から学ぶ』岩波ジュニア新書、2003

安島太佳由『日本の戦跡を見る』岩波ジュニア新書、2003

『千葉県の戦争遺跡をあるく』千葉県歴史教育者協議会、2004

『新版 東京の戦争と平和を歩く』東京都歴史教育協議会、2008

藤田昌雄『写真で見る日本陸軍 兵営の生活』光人社、2011

浜松 高射砲第1連隊

『浜松市郷土読本』浜松市教育会、1938

高射砲第一連隊史編纂委員会編『高射砲第一連隊概史 連隊史編纂資料』高射砲第一連隊史編纂委員会、1977

高射砲第一連隊史編纂委員会編『高射砲兵戦史 第2号』高射砲第一連隊隊友会、1979

神谷昌志編著『写真でつづる浜松市誌 明治から一〇〇年の歩み』国書刊行会、1980

作道好男編著『静岡大学工学部 大学の歴史』教育文化出版、1984

静岡新聞社編『浜松市民の80年 写真集』静岡新聞社、1991

『静岡大学工学部七十周年記念写真集』1992

静岡県近代史研究会編『史跡が語る静岡の十五年戦争 静岡県の戦争史跡ガイドブック』青木書店、1994

『浜松市史』浜松市、2000

静岡県教育委員会文化課編『静岡県の近代化遺産 : 静岡県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』静岡県教育委員会文化課、2000

鈴木正之監修『目で見る浜松の100年 写真が語る激動のふるさと一世紀』郷土出版社、2002

荒川章二「浜松の陸軍基地」『浜松の戦争遺跡を探る 静岡大学公開講座ブックレット2』所収、静岡大学生涯学習教育研究センター、2009

高射砲第 2 連隊 (国府台・柏)

- 「空の護り・高射砲連隊」アサヒグラフ 第 28 巻第 14 号 (1937 年 3 月 31 日) 所収
- 『歴史アルバムかしわ』柏市史編さん委員会編、柏市役所、1984
- 『平和へのねがい (改訂版)』(柏市立教育研究所編、柏市教育委員会、1986
- 『柏市史 近代編』柏市史編さん委員会編、柏市教育委員会、2000
- 『下総国府台和洋学園国府台キャンパス内遺跡第 1～4 次発掘調査報告—下総国国府跡の発掘調査—』和洋学園、2004
- 『歴史ガイドかしわ』柏市史編さん委員会編、柏市教育委員会、2007
- 上山和雄編著『柏にあった陸軍飛行場 「秋水」と軍関連施設』芙蓉書房出版、2015

高射砲第 3 連隊 (加古川)

- 『ハリマ化成 50 年史』ハリマ化成株式会社、1999
- 水足史誌編纂委員会編『水足史誌』加古川市野口町水足町内会、1990
- 加古川市史編さん専門委員編『加古川市史 第 3 巻』加古川市、2000

高射砲第 4 連隊 (甘木)

- 甘木市史編さん委員会編『甘木市史 下巻』甘木市史編さん委員会、1981
- 『証言大刀洗飛行場 大刀洗飛行場記録誌』(増補改訂版)福岡県筑前町、2009

高射砲第 6 連隊 (会寧)

- 写真「高射砲第五連隊の遠望」全期稲毛会 会報 30 (2002 年 8 月 15 日)

高射砲第 7 連隊 (立川)

- 「武蔵村山市立歴史民俗資料館報 資料館だより」(第 49・50 合併号、2008 年 10 月 25 日)

陸軍防空学校 / 陸軍高射学校 (千葉)

- 陸軍防空学校編『高射砲兵将校陣中必携』軍人会館出版部、1938
- 陸軍野戦砲兵学校・陸軍重砲兵学校・千葉陸軍高射学校編『陸軍少年砲兵』日本報道社、1944
- 『新向会二十年の歩み 小仲台 創立二十年記念』千葉市小仲台新向会自治会、1966
- 『千葉市立登戸小学校創立百周年記念誌 百年のあゆみ』千葉市立登戸小学校創立百周年記念実行委員会、1973
- 千葉市史編纂委員会編『千葉市史 第 2 巻 (近世近代編)』千葉市、1974
- 栗原東洋『四街道町史 兵事編 上巻』四街道町、1976
- 『新向会三十年の歩み 小仲台 創立 30 周年記念』千葉市小仲台新向会自治会、1978
- ノーベル書房編集部編『軍服の青春 陸軍編』ノーベル書房、1979

千葉市立図書館 10 周年誌編集委員会編『図書館の 10 年 暮らしの中の情報広場をめざして』千葉市立北部図書館、1982

記念誌編集委員会編『いぶき 小中台小学校創立二十周年記念誌』千葉市立小中台小学校、1984

『あゆみ 千葉市小中台新向会自治会創立四十周年記念誌』千葉市小中台新向会自治会、1986

『写真で見る七十年史：千葉大学工学部のあゆみ 田町・松戸・西千葉』千葉大学工学同窓会、1993

千葉市史編纂委員会編『絵にみる図でよむ千葉市図誌 下巻』千葉市、1993

千葉市立小中台小学校編『いぶき 小中台小学校創立 30 周年記念誌 わたしの学校・ぼくの町』千葉市立小中台小学校、1994

『若き空の御楯』編集室『若き空の御楯 陸軍高射学校生徒と特幹生の回顧録』『若き空の御楯』編集室（尼崎）、1994

千葉大学五十年史編集委員会編『千葉大学五十年史』千葉大学、1999

七夕会編『兵どもの夢のあと 七夕会記念誌 千葉大学教育学部附属小学校記念誌』七夕会、1999

千葉市総務局市長公室広報課編『写真集 千葉市のあゆみ（市勢要覧） 2001 新世紀・市制施行 80 周年記念 郷土が見える・わかる・語れる』千葉市総務局市長公室広報課、2001

市原徹『千葉市小中台町 850 番地の歴史 陸軍防空学校と戦災復興公営住宅があった町』私家版、2011

千葉市立小中台小学校 50 周年記念事業実行委員会編『いぶき 小中台小学校創立 50 周年記念誌』千葉市立小中台小学校、2014

「昭和十三年 学校歴史」千葉市史編さん作成「陸軍高射学校歴史①」千葉市郷土博物館所蔵

その他

『日本のタイル文化』淡陶株式会社、1986

『群馬県近代化遺産総合調査報告書』群馬県教育委員会、1992

『旧東京第二陸軍造兵廠火薬研究所 近代化遺産群調査報告書』板橋区教育委員会、2016

防衛研究所史料

アジア歴史資料センター（JACAR）が公開している防衛省防衛研究所所蔵の史料については、本文・キャプション・脚注内に、「史料名称—JACAR—Ref. ○○○（レファレンス番号）—防衛研究所」の情報を記す。

国土地理院航空写真

航空写真は使用写真とともに、整理番号—コース番号—写真番号 を示す。

調査年表

- 2014年
- 3月 柏市消防局西部消防署根戸分署の業務終了につき、取り壊し予定となった本建物の図面作成を柏市文化課より依頼され、3月4日に現地調査
- 3月25日 調査中間発表を実施
- 調査結果を受けて、建物の所管が柏市より教育委員会文化課に移る
- 7月- 調査継続 類例調査・追加調査を実施
- 現地調査：立川市10月17日・千葉市（下志津）11月11日
- 2015年
- 現地調査：浜松市1月20日・加古川市1月21日・千葉市（稲毛）2月27日、3月12日
- 2月 柏市文化財保護委員会に本調査の研究発表
- 柏現地調査：4月16日、本建物の模型を市原徹製作
- 5月 柏歴史クラブ主催の公開研究報告会（於 柏市中央公民館）「兵士は空を見る：空をつくる建築」を発表
- 11月 柏歴史クラブ主催の建物公開
- 2016年
- 2月 千葉県文化財保護指導委員会議で本調査の研究発表
- 3月 3DCG（三次元コンピュータグラフィックス）測量と現況図作成（柏市外部委託）
- 3月4日 柏現地調査 上の実施に伴い、1階天井・壁造作解体
- 4月- 3DCGによる高射砲第2連隊構内及び照空予習室の描画（柏市外部委託）
- 11月 柏歴史クラブ主催の建物公開
- 12月 柏市教育委員会のインターネットホームページで文化財デジタルアーカイブを開設、「照空予習室及測遠器訓練所（旧西部消防署根戸分署）」の解説動画公開
- 2017年
- 3月 同上にて「高射砲第2連隊3DCG版」公開
- 8月 柏歴史クラブ主催の公開研究報告会（於 アミュゼ柏）
- 前年より調査を実施した花野井秋水燃料庫と併せて「建物のなかに空をつくる一住宅街に立つ高射砲連隊の訓練施設一」を発表
- 10月 文化庁文化財部参事官（建造物担当）調査官現地実査、登録有形文化財の条件を満たす物件であると判断
- 12月 柏歴史クラブ主催の建物公開

協力者

(順不同、敬称略)

個人	浦久淳子	北河大次郎	徳田紫乃	見留武士
荒川章二	江口勉	小林正孝	中村勝彦	宮崎貴浩
安藤功	小野英夫	櫻井良樹	中村勝	宮本佳典
市原徹	大橋智子	鈴木健之	西和彦	四柳隆
伊藤正範	大森實	高橋健樹	原剛	龍清訓
井上茂實	岡田徹也	手塚高清	堀部由美子	渡邊義孝
上山和雄	金山行孝	寺坂政洋	三上謙吾	和田裕子

組織	高野台町会	浜松市教育委員会
朝倉市教育委員会	千葉県教育庁	浜松市立博物館
市川市立市川歴史博物館	千葉市立稲毛図書館	ハリマ化成株式会社
千葉市郷土資料館	千葉大学	文化庁
加古川市文化財調査研究センター	東邦大学	防衛省防衛研究所
加古川市立陵南公民館	名古屋市見晴台考古資料館	武蔵村山市立歴史民俗資料館
柏市消防局	株式会社パスコ	和洋女子大学
柏歴史クラブ	浜松工業会	

謝辞

さきゆきが見えないなか取り組み始めた調査でありましたが、情報の渦の中を踏み分けてゆくと、魔法のようにつぎつぎと視界が開けていきました。本研究では、多くの方々にお世話になり、ひとりでも欠けていたら先に進むことができなかつたと感じています。

調査の機会をいただき、全面的にご協力いただきました柏市教育委員会文化課のみなさまにお礼申し上げます。前任の渡辺健二様には密度の高い類例調査にご同行いただき、吉田敬様と江藤隆博様には暑い中、寒い中現場で調査におつきあいいただきました。小宮山勉課長のご支持があつてこそ、ここまで到達することができました。

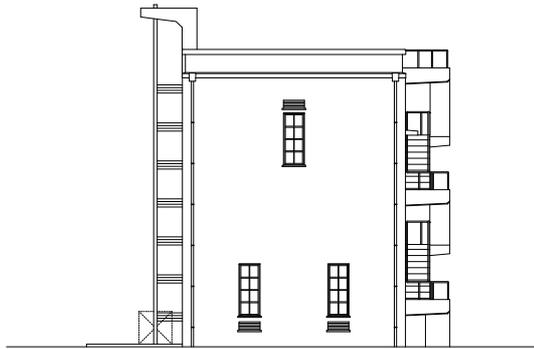
柏市歴史クラブの皆様には、本研究報告の場を重ねていただきました。

模型を作成いただいた市原徹様には、建物復原の各段階で共に取り組んでいただきました。

何よりも多くの良い縁に恵まれました。ご厚意をいただきました方々のお名前を上記に記します。

みなさまに心より感謝申し上げます。

金出ミチル



空をつくる建物

高射砲第二連隊 照空予習室
調査報告書

発行	2018年7月31日
著者	金出ミチル
発行	柏市教育委員会 生涯学習部文化課 千葉県柏市大島出48番地1
印刷	凸版印刷株式会社

